

# 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書

白山社及び駒形根神社・梅木田遺跡・平泉野遺跡

平成28年 3 月

一関市教育委員会



# 序

一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』<sup>むつのくに ほねでらむら え す</sup>の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。平安時代以来、中尊寺経蔵の荘園であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』<sup>あづまかがみ</sup>によって証明されています。平成17年には国史跡「骨寺村荘園遺跡」<sup>ほねでらむらしょうえん いせき</sup>に指定、18年には「一関本寺の農村景観」として国の重要文化的景観に選定されています。市教育委員会は25年度から、重要文化的景観の追加選定にも取り組んでおり、27年1月26日には新たに6.7haが文部科学大臣告示されたところです。

さて、骨寺村荘園遺跡と深い関係にある「平泉」は、23年6月に世界文化遺産に登録されました。世界遺産への拡張登録を目指している「骨寺村荘園遺跡」については、24年度に世界遺産暫定一覧表に登載され、市教育委員会は重点的に調査研究を行っています。

本年度は、25年度から継続している「白山社及び駒形根神社」と「梅木田遺跡」の発掘調査のほか、新たに「平泉野遺跡」<sup>へいせん の いせき</sup>の確認調査を実施しました。本書により、これらの調査成果を広く公開し、市民をはじめ全国の方々にも当市の文化財を知っていただき、関心が高まることを期待しています。また、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

最後に、調査に際しては地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々のご協力をいただきました。衷心より感謝を申し上げます。

平成28年3月

一関市教育委員会

教育長 小 菅 正 晴

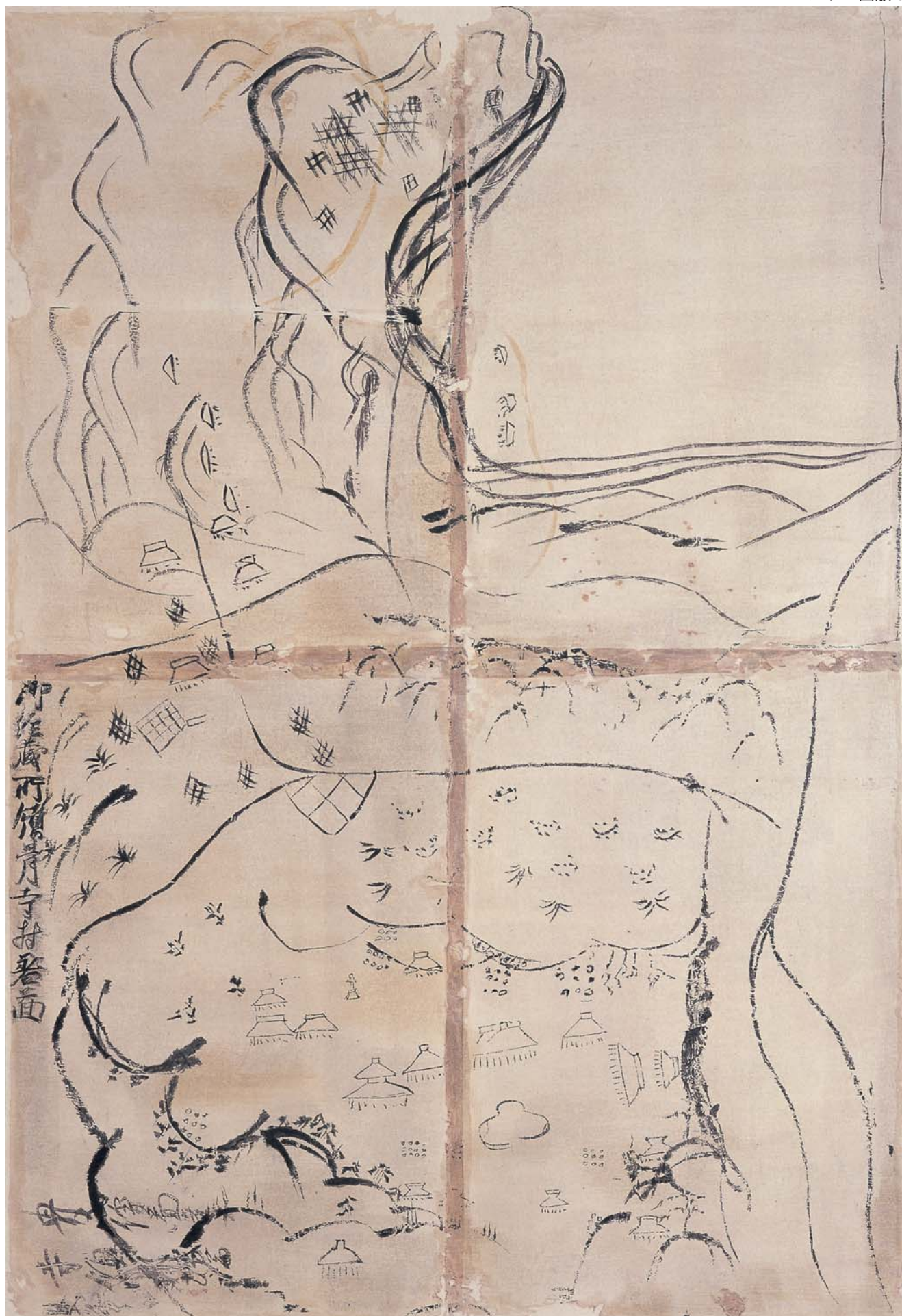




国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』詳細図(複製) 原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』簡略図(複製) 原典は中尊寺蔵



御成所領青寺村絵面

国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』紙背図(複製) 原典は中尊寺蔵



梅木田遺跡遠景写真



平泉野遺跡(若井原194-115地点)全景写真



# 例 言

1. 本書は、岩手県一関市教育委員会が平成27年度に行った骨寺村荘園遺跡に係る調査報告書である。
2. 調査は、国庫補助事業および県補助事業を活用した。
3. 調査は、平成7年に国の重要文化財に指定された『陸奥国骨寺村絵図』（中尊寺蔵）の現地として、一関市巖美町本寺地区に所在する国指定史跡骨寺村荘園遺跡の範囲および内容の確認のための発掘調査を実施したものである。
4. 調査対象地は、骨寺村荘園遺跡の構成要素である「白山社及び駒形根神社」、「梅木田遺跡」および隣接地にある「平泉野遺跡」である。
5. 調査主体は、一関市教育委員会 教育長 小菅正晴であり、現地調査は文化財課が担当した。
6. 調査体制は以下のとおり。

教育委員会	文化財課	課長	佐藤武生
		文化財係長	畠山浩
		学芸員	菅原孝明
		文化財調査研究員	山川純一
		文化財調査研究員	二階堂里絵
		期限付臨時職員	及川憲一
7. 本書の作成は文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集は二階堂が行った。
8. 調査に係る三次元測量および国土座標取り付け業務は株式会社八州に、調査補助および調査区刈り払い業務は本寺地区地域づくり推進協議会に、自然科学分析に係る業務は株式会社加速器分析研究所に、それぞれ委託した。
9. 現地調査および報告書作成にあたっては、一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会および同世界遺産推進部会、岩手県教育委員会平泉遺跡群調査整備指導委員会の指導と助言を得ている。また、出土した陶磁器の鑑定については、羽柴直人氏（岩手県立博物館主任専門学芸員）に指導をいただいた。
10. 調査協力者・機関（敬称略・順不同）  
石川慶男、伊藤光一、永越信吾（葛飾区郷土と天文の博物館学芸員）、小巖芳夫、佐々木一男、佐々木源輔、佐々木力、佐々木登志也、佐々木需、佐藤勲、佐藤勝志、佐藤金朗、佐藤賢吉、佐藤凡夫、佐藤徳美、佐藤弘夫（東北大学文学部教授）、佐藤弘征、佐藤みゑ子、佐藤光男、佐藤育美、佐藤やす子、佐藤六郎、本寺地区地域づくり推進協議会、骨寺村ガイド運営協議会、文化庁、岩手県教育委員会、平泉町教育委員会、奥州市教育委員会
11. 本書に係る調査報告会は、平成28年2月7日に骨寺村荘園交流館「若神子亭」で実施した。
12. なお、「1. 位置と環境」、「2. 調査に至る経緯」については、一関市教育委員会2015『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集 骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』の文章を引用し、必要に応じて加筆修正を行った。

# 目 次

序	1
カラー図版	3
例言	7
1. 位置と環境	9
2. 調査に至る経緯	13
3. 白山社及び駒形根神社（中川6地点）の調査	18
4. 梅木田遺跡の調査	27
5. 平泉野遺跡（若井原194-115地点）の調査	39
6. 骨寺村荘園遺跡の踏査（白山社及び駒形根神社周辺）	49
7. 平泉野遺跡（若井原194-115地点）に係る火山灰分析	51
8. 平泉野遺跡（若井原194-115地点）に係る放射性炭素年代測定（AMS法）	53
9. 総括	61
遺物観察表	63
写真図版	65

# 1. 位置と環境

## 1. 一関市の位置と環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年9月20日に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の7市町村が合併、さらに23年9月26日に藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1,256.42km<sup>2</sup>である。

中央部を北上川が南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある緑豊かな農山村である。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山（須川岳）を中心とする火山性山岳風景地の「栗駒国定公園」（昭和43年（1968）国指定）や北上川水系磐井川流域の史跡「骨寺村荘園遺跡」（平成17年（2005）国指定）および重要文化的景観「一関本寺の農村景観」（平成18年（2006）国選定）、下流部には磐井川によって滝あるいは急流、深い淵となって変化に富んだ溪谷景観をなす名勝および天然記念物「巖美溪」（昭和2年（1927）国指定）がある。東側には同じ北上川水系の砂鉄川流域に、古生代の石灰岩層が川の浸食によって形成された名勝「狹鼻溪」（大正14年（1925）国指定）がある。

## 2. 骨寺村荘園遺跡の位置と環境

骨寺村荘園遺跡は須川岳を見上げる中山間地にある。遺跡のある一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として、中世以来の農村景観を良好に継承した地域で、須川岳から流れ出る磐井川の左岸に形成された小盆地に集落が点在する。平地部分の平均海拔高は約160m、南側を磐井川に接し、三方は海拔230mから260mの丘陵に囲まれている。

骨寺村荘園遺跡を取り巻く自然環境については、骨寺村荘園遺跡村落調査研究の一環である自然班（総括：広田純一（岩手大学教授））による一連の研究成果がある。地形・地質を担当した土井宣夫によると、磐井川に沿う地形の特徴は、須川岳北斜面から北上川へ合流するまでの間、いくつもの狭窄地によって数珠状の小盆地を形成している点にある。磐井川の流域には硬質の巖美層が広がる。この層は褶曲により磐井川の下底と河岸に交互に出現するため、下底（縦方向）と河岸（横方向）への侵食速度に差異が生じて、数珠状の小盆地が形成されたとしている。また、巖美層が交互に出現する理由は、断層活動により層に褶曲が生じているためであるという（土井2012）。このようにして形成された小盆地の一つに骨寺村荘園遺跡は所在する。

現在の植生について島田直明は、北側丘陵部にはコナラやクリの広葉樹が広がっているとし、斜面下部には植林によるスギ林があり、上部の尾根にはアカマツやゴヨウマツ林が分布するとしている。また一部にはブナ林も確認できたという。植物相からは日本海型要素と太平洋・温暖帯要素の両方のタイプが見られたとし、岩手県内陸部の中山間地としての地勢を反映しているものとみられる（島田2012）。それと関連して、磐井川左岸の旧河道地を対象に花粉分析を行った平塚明らは、915年に降下した十和田a火山灰の上層からイネ花粉が急増することを指摘しており、この時期に水田に生息する水生植物（オモダカ・サジオモダカ属）の増加から、本格的な稲作が始まったことを想定している。同時期にクリの花粉、アサヤソバの花粉も増加している。また堆積速度から14世紀以降にはスギやマツ林の拡大が推定されている（平塚他2012）。ただし十和田a火山灰の降下以降に上記の傾向が認められるとしても、土層堆積が継続的かつ安定的であったかが検討課題となる。年代についてもやはり発掘成果との突合が不可欠である。

### 3. 骨寺村莊園遺跡の発掘調査成果

骨寺村莊園遺跡の歴史的背景については、すでに重厚な議論が積み重ねられている。特に中尊寺経蔵別当領であった時代については、文献史学からの研究蓄積がある。ここでは、これまでの発掘調査の成果を概述したい。

骨寺村莊園遺跡は、縄文時代中期から弥生時代までの土器や石器が出土している。全体量は多くないが、縄文後・晩期が主体を占めるようである。平成21年度調査では、逆茂木が残る落し穴が発見されており、22・23年度にも楕円形の落し穴が検出されている。これらは駒形根神社西方の平泉野台地で発見されており、当該地は狩り場として機能していたことが想定される。また不動窟<sup>ふどうのいわや</sup>や慈恵塚<sup>じえづか</sup>付近でも縄文土器が出土・採集されており、遺跡は丘陵部全体に分布するものと推定される。ただし、これまで住居跡等は発見されておらず、集落形態は未詳である。その後、しばらくの間、村の様相を示す考古資料は見られない。

次に確認できるのは、9世紀後半ごろの土師器<sup>はじき</sup>や須恵器<sup>すえき</sup>である。21年度調査では、平泉野台地から9世紀後半ごろの内面黒色処理された土師器碗や須恵器が出土しており、同時期とみられる土師器と須恵器は、平地部分の水田を対象とした24年度調査（骨寺村莊園景観保全農地整備事業に伴う緊急発掘調査）でも出土している。また味ヶ沢でも同時期の須恵器片が採集されており、どうやらこのあたりから、村の開発が行われたようである。ただし、遺構との関係は依然として不鮮明である。

12世紀になると本寺地区は、中尊寺経蔵別当領となる。遠西遺跡では、12世紀の常滑窯製品<sup>とこなめよう</sup>三筋壺<sup>さんきんこ</sup>と13世紀と推定される底部糸切りの小型かわらけが出土している。梅木田遺跡では、遺構外からではあるが13世紀中頃から後半の龍泉窯系青磁<sup>りゅうせんようけいせいじ</sup> 鎚蓮弁文碗<sup>しのぎれんべんもんわん</sup>が出土している。これらの在家に係る痕跡は北側山稜部の山裾に分布し、絵図に描かれる散居形態をよく反映している。現在も山裾には屋敷が建ち並び、中世以来の景観を継承している。

さて、北側丘陵部東端に慈恵塚がある。22年度調査では塚本体および周辺の精査を行い、直径約10m、最大高約2.2mで、同心円状に溝と土塁を伴うことが判明した。物理探査では塚の中心に何らかの物体が埋没していることが推定された。金属反応はない。この形態は北東北特有の巨大経塚と酷似し（関根2009）、村を見下ろす立地からも経塚である蓋然性が高い。大堀相馬窯製品の土瓶や瀬戸窯製品の燈明具などの近世から近代までの遺物が出土しているほか、周辺の慈恵大師に係る石造物は近世後期に建てられたものである。地誌類の整理から、塚が慈恵大師伝承と結びついたのは『封内風土記』（1772）以降であることが推定できる。つまり、塚は近世後期に「慈恵塚」と称され、再顕彰されたものと推定できる。ちなみに絵図に描かれた「慈恵柄（塚）」やその図像は後筆であることが指摘されている（大石1984）が、後筆の時期も再顕彰された後であることが推定できる。

23年度には不動窟の調査を行っている。窟は最大高約3m、奥行き約13mの自然洞窟で、壁面には燈明のための孔が穿たれてあり、入口部には貫を通した痕跡が見つかった。これは、ある時期において扉等で窟内部を閉塞し、燈明を灯した痕跡であると考えられる。窟内部からの出土遺物はない。

近世の調査事例では、梅木田遺跡の掘立柱建物が検出されており、近世と考えられる陶器<sup>すりばち</sup>挿鉢片が出土している。遠西遺跡でも近世と考えられる掘立柱建物が検出されているが、出土遺物が希薄なため、中世のものとの峻別が困難である。先に触れた慈恵塚では信仰に係る近世陶器が出土しているため、中世以降現代に至るまでの継続的な村の営みが想定できる。

なお、平成24年度調査（骨寺村莊園景観保全農地整備事業に伴う緊急発掘調査）で出土した柱痕は、放射性炭素年代測定（AMS法）により15世紀前半から16世紀初頭までの年代が推定されている。

#### 4. 中尊寺領としての骨寺村

中尊寺には、骨寺村の中尊寺莊園としてのはじまりを示す古文書が残されている。『中尊寺文書』には藤原清衡の命令により自在房蓮光<sup>じざいぼうれんこう</sup>という僧侶が奉行し、8カ年をかけて紺紙金銀字交書一切経<sup>こんしきんぎんじこうしよいつさいきょう</sup>を完成させたこと、その褒美に蓮光は中尊寺経蔵別当に就任したこと、そして蓮光の「往古私領」であった「骨寺」を経蔵に寄進し、永代にわたって経蔵別当領とすることが記されている。こうして、骨寺村は中尊寺領となった。この文書の日付は天治三年（1126）三月二十五日である。

その後、文治五年（1189）の奥州合戦で、奥州藤原氏は滅亡する。これにより、中尊寺は庇護者を失ってしまう。『吾妻鏡』文治五年九月十日条には、中尊寺経蔵別当心蓮は所領<sup>あんどう</sup>の安堵を求めため、源頼朝の宿所に参上したことが記されている。

心蓮は頼朝に対し、中尊寺は清衡が建立したこと、鳥羽院の祈願所として寺領の寄付を受け、御祈禱料もあてられていること、特に経蔵は金銀字交書一切経を納めている霊場であることを述べている。そして、中尊寺の存続と寺領の安堵を求めている。これに対し頼朝は、はじめに経蔵領である骨寺村の四至<sup>しいし</sup>（村境）を定めた上で、諸役免除の文書を下した。定められた四至は、東が鑑懸<sup>かぎかけ</sup>、西が山王窟<sup>さんおうくつ</sup>、南が磐井川<sup>のうのいわや</sup>、北が峯山堂<sup>みたけどう</sup>の馬坂<sup>まさか</sup>である。この範囲が鎌倉時代後期に作成された『陸奥国骨寺村絵図』に描かれ、地名や遺跡として現在まで残されているのである。その後、室町時代まで経蔵別当領として相伝されており、それらは中尊寺文書によって明らかである。

#### 5. 『陸奥国骨寺村絵図』について

中尊寺大長寿院には2枚の絵図が残されている。一つは簡略図と呼ばれるもので、骨寺を取り囲む山稜部がダイナミックに描かれている（カラー図版2）。もう一方は多くの書き込みと描写から詳細図と呼ばれる（カラー図版1）。いずれも西を天（上）とし、山稜部に囲まれる村落景観が描かれている。絵図の描写範囲は、『吾妻鏡』文治五年九月十日条に記された村の四至と対応する。すなわち頼朝によって定められた村の範囲が描かれている。

今日、奥州の関山中尊寺の経蔵別当である大法師心蓮が二品（源頼朝）の御宿所に参上し、歎き訴えた。「当寺の経蔵をはじめとする仏閣・塔婆は、（藤原）清衡が草創したものではありませんが、かたじけなくも鳥羽院の御願所となり長い年月を経てきました。寺領を寄付され、また御祈禱料もあてられてきました。経蔵には金銀泥行交りの一切経が納めてあり、霊験あらたかな霊場です。したがって常に衰微しないようにお定めください。次に当国で合戦があったため、寺領の住民らが恐れをなして逃亡しています。早く安堵するよう命じてください」。そこで心蓮を御前に召し清衡・基衡・秀衡三代の間に、建立した寺塔の事を尋ねられた。はっきりと答え申した上、詳細は（書面で）注進する旨を言上した。そこでまず骨寺の境の四至（東は鑑懸、西は山王窟、南は岩井河、北は峰山堂の馬坂である）内について諸役免除の文書を下された。逃亡している住民らは元の住所に戻って来るよう仰せ下されたという。散位（藤原）親能がこれらを奉行した。

（五味・本郷2008）

絵図の作成目的は、中尊寺による村支配のための資料とする説（伊藤1957・吉田2008）と裁判の証拠書類説（大石1984）が提示されてきた。しかし、絵図の裏書に「境論具書」が発見されたことにより（黒田1995）、所領争いの裁判書類であることが有力となった。作成時期は、簡略図が鎌倉時代中期、詳細図が鎌倉時代後期と推定されている。

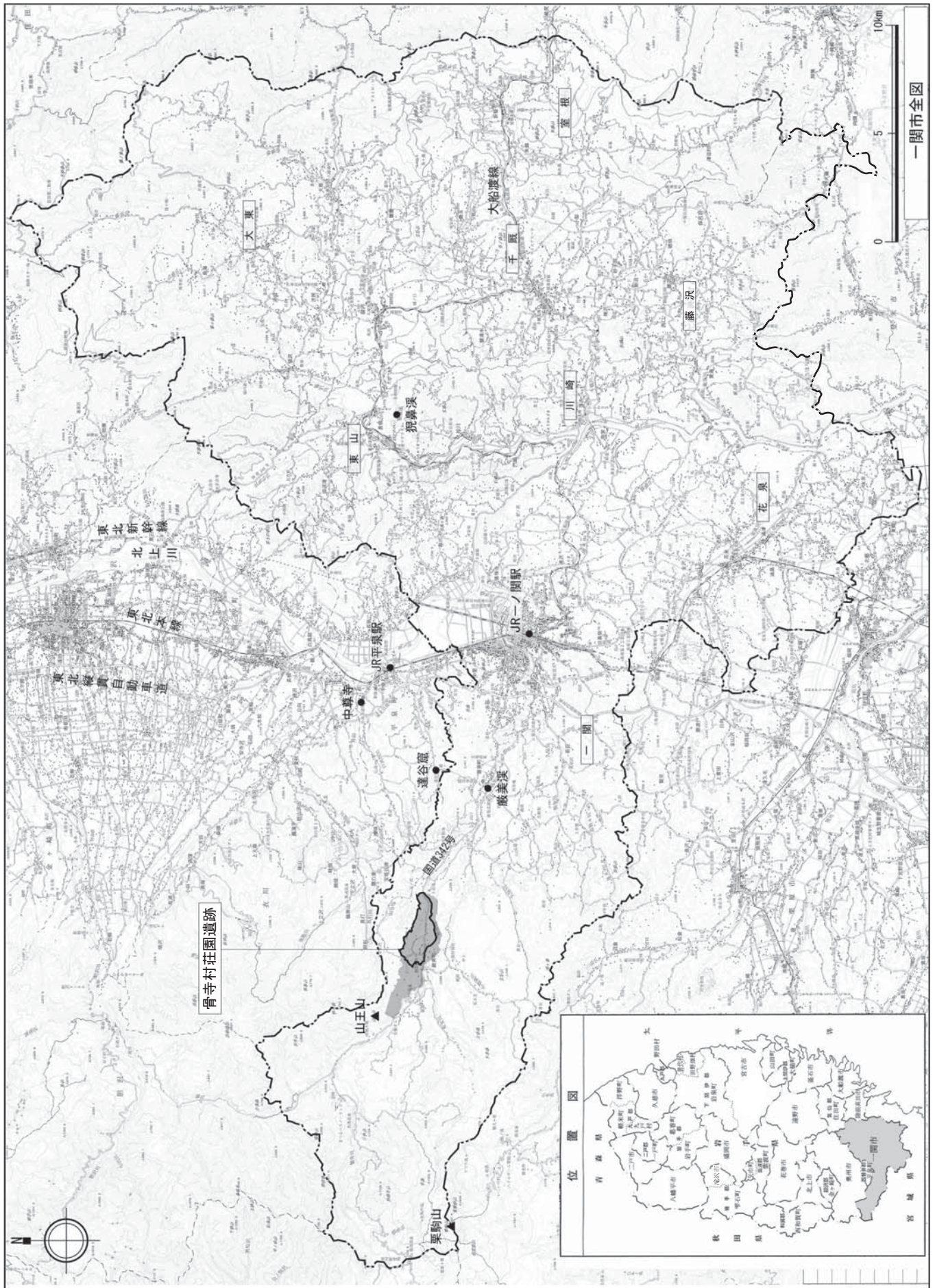


図1 骨寺村荘園位置図

## 2. 調査に至る経緯

### 1. 骨寺村荘園遺跡に係るこれまでの取り組み

平成5年2月	本寺地区全住民を会員とする美しい本寺推進本部発足、伝骨寺跡を調査
平成7年4月	『陸奥国骨寺村絵図』が国指定重要文化財となる
平成7年度	陸奥国骨寺村調査委員会（大石直正委員長（東北学院大学教授））発足 歴史地理・民俗、地方文書、石造物の調査部会
平成8～10年度	骨寺村荘園総合調査 一関市教育委員会主体の調査を開始、1/2000ベースマップを作成
平成11年度	中屋敷遺跡確認調査…総柱の掘立柱建物の検出、用途不明の金属製品の出土
平成12年度	梅木田遺跡確認調査…掘立柱建物の検出 大型の柱穴であり、平泉遺跡群との関連性が想定された
平成13年度	中世骨寺村荘園遺跡整備委員会が圃場整備と遺跡保存について調整を検討 遠西遺跡確認調査…掘立柱建物跡、かわらけ片、常滑三筋壺片の出土 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会が整備と保存の方向について答申。「骨寺村荘園遺跡」の景観保全型の整備を提案。史跡と営農の調和を図り、文化財を活かした地域づくりの方向性を示す
平成14年度	遠西遺跡確認調査…掘立柱建物跡の検出
平成15年度	荘園遺跡属性確認調査
平成15年6月	骨寺村荘園遺跡が世界文化遺産の資産に追加
平成15年8月	骨寺村荘園遺跡調査整備指導委員会設置
平成16年3月	本寺地区地域づくり推進協議会発足 景観保全・活用、世界遺産登録に向け、集落営農、圃場整備等の課題に取り組む
平成16年度	若神子社周辺の確認調査
平成17年3月2日	骨寺村荘園遺跡の国史跡指定が告示される（文部科学省告示第22号） （山王窟、白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、伝ミタケ堂跡、遠西遺跡、要害館跡、若神子社、不動窟、慈恵塚および拝殿）
平成17年度	平泉野遺跡確認調査…縄文時代の石器が出土
平成18年度	駒形根神社境内確認調査、字若神子東端の確認調査
平成18年7月28日	本寺地区の平野部を中心とした337.5haが国内2番目の重要文化的景観に選定（文部科学省告示第121号）
平成18年9月14日	政府が世界遺産へ推薦することを決定、世界遺産条約関係省庁連絡会議
平成18年12月26日	推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成19年度	駒形151-1・153-1確認調査…縄文土器片、石器等の出土
平成19年8月26～30日	イコモスが現地調査
平成20年5月	イコモスが「登録延期」を勧告
平成20年6月14日	岩手宮城内陸地震（マグニチュード7.2）発生。震源地は本寺地区の西方約3km
平成20年7月	カナダケベックシティで行われた世界遺産委員会で登録延期が決定

平成21年度	平泉野遺跡（巖美町字若井原188番外地点）確認調査…縄文土器、石器剥片、落し穴、9世紀代の須恵器と土師器が出土
平成21年4月4日	国際専門家会議、推薦書作成委員会で世界遺産登録を目指す資産の絞り込みが提案され、平成23年の世界遺産登録後の対応資産として、骨寺荘園遺跡、長者ヶ原廃寺跡、白鳥館遺跡、達谷窟の4資産が調査の進展により段階的に拡張登録を目指す方針を確認
平成22年1月	『平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群』 世界文化遺産登録推薦書提出
平成22年度	慈恵塚現状確認調査、精査および三次元測量…近世地誌類や出土遺物、石造物の整理から慈恵大師伝承と古塚が結びついたのは近世後期と推定 平泉野遺跡（巖美町字若井原194-1地点）確認調査…縄文時代の焚火跡を検出
平成22年9月8・9日	イコモス現地調査、調査員ワン・リジュン氏（中国イコモス国内委員）
平成23年3月11日	14時46分頃、マグニチュード9.0の巨大地震発生（震災名：東日本大震災）
平成23年度	不動窟確認調査、精査および三次元測量…貫痕と燈明台の痕跡を確認 白山社及び駒形根神社確認調査…縄文時代の落とし穴を検出
平成23年5月	イコモスが「登録」を勧告
平成23年6月29日	『平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群』世界文化遺産に登録。ただし、柳之御所遺跡は除く
平成23年11月14日	第1回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会開催
平成24年3月22日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会開催
平成24年度	白山社及び駒形根神社確認調査…縄文時代の落とし穴、十和田a火山灰の検出、伝ミタケ堂確認調査…自然決壊による崩落岩盤の検出 不動窟確認調査…基盤層とみられる自然堆積層の検出
平成24年5月18日	第3回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会開催
平成24年9月25日	骨寺村荘園遺跡を含む「平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群（拡張）」が世界文化遺産暫定一覧表に記載
平成24年10月26日	「平泉の文化遺産」拡張登録に関係者（県教育長、二市一町首長）会議開催 追加登録に係る方針と調査計画を合意
平成25年1月30日	第4回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会開催
平成25年度	伝ミタケ堂跡確認調査…遺構遺物ともに発見されず 不動窟確認調査…窟前面に3基の柱穴を確認 白山社及び駒形根神社（中川6地点）確認調査…大規模土地造成と掘立柱建物を確認 梅木田遺跡確認調査…大型の掘立柱建物の確認、龍泉窯系青磁碗片の出土
平成25年11月22・23日	平成25年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会開催
平成26年1月7日	第5回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会開催
平成26年度	白山社及び駒形根神社（中川4・6地点）確認調査…中川4地点の塚の自然科学分析を実施、13世紀後半と推定 梅木田遺跡確認調査…近世中後期の遺構変遷を推定



平成26年11月29・30日	平成26年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会開催
平成27年1月6日	第6回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会開催
平成27年1月26日	本寺地区の一部6.7haが重要文化的景観に追加選定（文部科学省告示第6号）
平成27年度	白山社及び駒形根神社（中川6地点）確認調査 梅木田遺跡確認調査 平泉野遺跡（若井原194-115地点）確認調査
平成27年11月14・15日	平成27年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会開催
平成28年1月5日	第7回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会開催

## 2. 平成27年度調査に至る経緯

一関市教育委員会は、平成8年度から骨寺村荘園遺跡の調査を始め、11年度から発掘調査を実施してきた。15年からは平泉の文化遺産の一つとして世界文化遺産への登録を推進してきたが、21年4月の推薦書作成委員会で「登録推進の資産候補から除外し拡張登録を目指す」旨が通達された。平泉文化と骨寺村荘園遺跡との関わりについて、更なる調査研究が不可欠であると指摘されたのである。その後、23年度に「平泉」は世界文化遺産に登録された。翌24年度、骨寺村荘園遺跡を含む拡張資産は、世界遺産暫定一覧表に記載された。

これまでの発掘調査は、本寺地区に現存する文化的景観を手がかりにして、絵図に描かれた田圃や在家の地下痕跡の確認を主題に、本寺地区平野部を中心に調査を実施してきた。その結果、本寺地区北側の山裾や微高地に遺構の残存率が高いこと、中世遺物の出土からその一部は中世まで遡る可能性があることが判明している。平地部の遺構の埋没状況については、中世以来、土地利用目的が原則的に変更されていない居住地に高い可能性を指摘できる。

一方、絵図に記された宗教施設の解明については、18年度に駒形根神社境内を試掘調査しているが、明確な遺構は発見されていない。また、17年度に絵図に描かれた「骨寺（堂）跡」の地下痕跡の確認を目的として駒形根神社南西部の斜面地を試掘調査を行っているが、これも中世に遡る遺跡の発見には至っていない。

これらを鑑みると、村落遺跡としての遺構残存状況の把握は一定の成果を得ていると見てよいであろう。それに対して宗教施設との関わり、特に埋蔵文化財については、依然として不鮮明な部分が多く残されている。

21年度に世界遺産登録への再挑戦を始めた「平泉の文化遺産」は、コンセプトに宗教性の高い「仏国土（浄土）」を掲げ、23年6月に「平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」として世界文化遺産に登録された。市教育委員会ではこのコンセプトに対応するべく、骨寺村荘園遺跡の中でも特に宗教施設を中心に7カ年の調査計画を立て、段階的に調査を実施している。25年度からは既計画に追加された梅木田遺跡の調査も実施している。

本年度は、25年度から継続して「白山社及び駒形根神社」（中川6地点）、「梅木田遺跡」の発掘調査を実施した。さらに、「平泉野遺跡」（若井原194-115地点）の確認調査を追加した。



1:15000

図2 骨寺村莊園遺跡における既調査地点

番号	調査地	遺構・遺物	調査年度
1	沖要害52-1	なし	平成11年度調査
2	沖要害72・77、中屋敷遺跡	掘立柱建物、石組井戸、銅製品	平成11年度調査
3	駒形85-1	柱穴、柱根、木製品	平成11年度調査
4	駒形86	小穴	平成11年度調査
5	駒形89-2	銅製品	平成11年度調査
6	駒形96-1・107-1	なし	平成11年度調査
7	駒形40-2・44	なし	平成11年度調査
8	中川32-1、梅木田遺跡	掘立柱建物、溝、柱根、陶器、中国産磁器	平成12・25・26・27年度調査
9	中川28-1・35	なし	平成12年度調査
10	中川6	近世造成面、掘立柱建物、建物礎石、池状遺構、近世磁器	平成12・25・26・27年度調査
11	中川4	塚	平成25・26年度調査
12	要害141-4・146-3	なし	平成12年度調査
13	要害118・119	なし	平成13年度調査
14	要害79-1・114-1・115-21、 遠西遺跡	掘立柱建物、柱穴、土坑、井戸、溝 柱根、常滑三筋壺片、かわらけ片	平成13・14年度調査
15	要害70・72	柱穴、井戸、焼土・炭化物	平成14年度調査
16	要害69-1	なし	平成13年度調査
17	要害23・54-1	近世板蔵基礎	平成13年度調査
18	要害127-2	なし	平成14年度調査
19	若神子31-2、若神子社	石祠	平成16年度調査
20	若神子43・45・46	なし	平成16年度調査
21	駒形5、白山社及び駒形根神社	炭窯跡	平成17年度調査
22	駒形5、白山社及び駒形根神社	石匙	平成17年度調査
23	駒形8-1、白山社及び駒形根神社	小穴、石鎌、銭	平成18年度調査
24	若神子85-3・87-1・90-4・92-2	なし	平成18年度調査
25	若神子88-1	なし	平成18年度調査
26	若神子81・86-1・86-4	なし	平成18年度調査
27	駒形153-1	なし	平成19年度調査
28	駒形151-1	溝、縄文土器片、石器	平成19年度調査
29	若井原188・194-35・194-36、 平泉野遺跡	落とし穴、旧流路、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片	平成21年度調査
30	若井原194-1、平泉野遺跡	焼き火跡、縄文土器片、剥片	平成22年度調査
31	下真坂25-5、慈恵塚	近世陶磁器、近世銭	平成22年度調査
32	下真坂80-2、不動窟	洞窟、柱穴、縄文土器片、弥生土器片、剥片、近世銭	平成23・24・25年度調査
33	駒形5、白山社及び駒形根神社	土坑、縄文土器片、石器	平成23年度調査
34	中川19-1	土坑、縄文土器片、石器	平成20年度調査
35	要害59-1	小穴	平成20年度調査
36	要害194-1・194-2	柱穴、土師器片、須恵器片	平成23・24年度調査
37	駒形7、白山社及び駒形根神社	落とし穴、縄文土器片、剥片	平成24年度調査
38	要害204-1、伝ミタケ堂跡	なし	平成24・25年度調査
39	若井原194-115、平泉野遺跡	近世磁器、縄文土器片	平成27年度

※番号は図2 と対応。

表1 骨寺村荘園遺跡における既調査

### 3. 白山社及び駒形根神社（中川6地点）の調査

調査地点は、平泉野台地と呼ばれる丘陵の北側裾部の山林で、一関市巖美町字中川6である（図2・4）。南東約250mに駒形根神社がある。この地点を含む近隣に関する伝承として、「ウナダ」屋敷というものがあったという。「ウナダ」とは、宇奈根社の神田である、とする見解がある（大石1984）。現地での調査期間は平成27年5月11日から9月16日まで、調査面積は122m<sup>2</sup>である。

利用した測量基準杭の成果は以下のとおりである。

基014 X = -113404.565、Y = +9827.648、H = 188.427

基015 X = -113386.028、Y = +9814.008、H = 187.593

中川6地点は平成12年度に小範囲の発掘調査が行われ、近世の造成面と報告されている。しかし、24年度踏査で新たに複数の平場と土地の造成痕跡を確認したため、25・26年度に調査範囲を広げて発掘調査を実施した。本年度はその継続調査である（図4）。

最大の平場は、南東側を沢に、南西側を一段高い山林に区切られた20m×15mの概ね長方形である。この平場にA～H・L区の調査区を設定し、さらに地形造成範囲を確認するため、B区南東端、C区北端にそれぞれ拡張区を設定した（図5）。この平場の北側には長径7m、短径5m程の楕円形の窪み地形がある。25・26年度にK・L区を設定し、調査したところ池状遺構とみられる遺構を確認した。本年度はこのL区の南端のみ再調査を行った。地形はL区の北側約18mで崖になり、比高差2m下を山裾に沿って農道が通り、それ以北は水田が広がる。

#### （1）基本土層

I層 10YR3/2黒褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。現表土（図6-1層）。

II層 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりややなし。草の根が多く入る。自然堆積。近世陶磁器が出土する。（図6-2層）。

III a層 10YR4/4褐色シルト。岩石粒？（径0.5～3.0cm大）が一部に微量入る。粘性あり。固くしまる。上部に黒褐色土が混じる。地山層（図6-13層）。

III b層 10YR5/6黄褐色シルト。小礫が入る。砂質分・マンガン粒を多く含む。固くしまる。地山層（図6-14層）。

#### （2）遺構

**造成層**（図5・6、写真図版2-1～5）平成26年度調査の報告書で「造成層3」としていたものである。平場北東部のB・C・D区で確認した。西側の山を切り、東側の斜面に盛土したものと考えられる。25・26年度調査では、この造成より古い造成に係る造成層である「造成層1」が存在するとしていたが、本年度調査で、この層は地山層であることを確認した。また、25・26年度調査では当造成層が堆積する範囲は、B区南東端拡張区の北側以北に限定されると考えていたが、本年度、B区にサブトレンチを設定して層の断面を観察した結果、平場の南端まで拡がり、石材3の下に入ることを確認した（図6 D D' -15層）。B区南東端拡張区では、暗褐色～黒褐色シルトに黄褐色地山塊が混じり大小の礫を含む比較的しまりのない土の層で形成され、層厚最大約0.4mの層が幾層にもわたり斜面堆積している（図6 B B' -15～18・23～25層）。上端から下端の比高差は約1.7mである。造成は短期

間で行われているとみられるが、所作は雑駁である。B区北東端には表面に小礫が集中する部分がある。25・26年度調査では「溝2」としていたが、本年度サブトレンチで再度断面の観察を行った結果、溝ではなく造成層の堆積の一部であると結論付けた。また、25・26年度調査でB区南東端拡張区に南北に延びる石列を確認している。本年度この石列を断ち割り、壁断面で石列を埋めたとみられる掘り込みの層を確認した(図6 B B' -21層)。この石列は造成土の土留めとして設置されたものとみられる。25年度調査でB区北半の当造成層中から近世陶磁器片が出土しており、そのうち1点は17世紀前半の肥前産磁器皿であった。造成が行われたのはこれ以降と考えられる。また、A区北東端で沢の埋没層を壊しており、これより新しい。

**埋没沢** (図5・6、写真図版2-6) 26年度調査の報告書では「造成層2」としていたものであり、平場南東側のA区で確認した。暗褐色～黒褐色シルトに黄褐色地山塊が混じり、大小の礫を含む比較的しまりのない砂質土の層が幾層も堆積している(図6 E E' -34~39層)。沢が自然埋没したものとみられ、現在流れる沢はこの層の上を流れている。造成層に壊されていることから、平場が造成される以前に埋没していたことがわかるが、詳しい年代は不明である。遺物は出土していない。

**掘立柱建物** (図5・6、写真図版2-7) C・E・F・H区の地山層および造成層上面で7基の柱穴を検出した。25年度調査でP1~6を、26年度調査でP7を確認した。またP3と5の間にあったと考えられる柱穴が風倒木痕により壊されて存在していないことが明らかになっている。長軸3間、短軸1間の建物で長軸の柱間尺は南から2.1m・2.0m・2.4m、短軸の柱間は5.2mである。長軸方向はN-27°-Wと平場の軸とは異なる。柱穴の直径は約0.7m程度あり、底面レベルは標高186.7~187mとばらつきがある。ほとんどの柱は抜き取られているが、P6では確認面で柱痕跡を確認した。

本年度調査で造成層との関係を再精査した結果、この建物は平場の造成後に建てられたもので、造成層より新しいことを確認した(図6 I I' -9・53・54層)。また、風倒木痕より古い。柱穴埋土からの出土遺物はないが、造成層から17世紀の肥前産磁器片が出土していることから、それ以降に建てられたものである。

**礎石建物** (図5・6、写真図版2-1・3) 本調査区周辺には礎石状の石材が複数あることから礎石建物があつたと推測し、調査を実施してきた。石材1~3はいずれもB区にある。石材1は直径1.4mの安山岩で上面は概ね水平である。下端が造成層に入っていることから、ここに置かれたのは近世以降であることが想定される。石材2は直径0.9mの花崗岩で、上面はやや丸みを帯びた形状である。下端が造成層に入っていることから、一部にサブトレンチを入れてその下の状況を観察したが、根石や据え方は確認できなかった。石材3は直径0.8mで柱状節理を利用した加工石材と推定される。上面は水平、多角形に加工した痕跡がみられる。下部に一部根石状の石が見え、原位を保った建物礎石である可能性が高い。本年度調査でその下端が造成層に載っていることを確認した。また周辺には他にも礎石状石材がいくつかあり、25年度調査で確認したA区の根石状集石やE区の土坑2の浅い窪み状の遺構が礎石の据え方になる可能性もあり、礎石建物が存在した可能性は高い。後世の削平によりいくつかの痕跡が失われた可能性も否定できない。また、礎石建物が存在した場合、平場のスペースからみて掘立柱建物との併存は考え難く、時期差があるとみられる。

**風倒木痕** (図5・6、写真図版2-8) F区とE区の東端、地山上面で検出した。直径は3.3m以上の概ね円形とみられ、深さは最深0.5mである。埋土には大小の礫が多数入っていた。風倒木痕の可能性が高く、これに壊されたことにより、掘立柱建物を構成する柱穴が失われている。遺物は出土していない。

**池状遺構** (図5・6、写真図版3-1・2) 26年度調査で最大平場の北西に隣接する窪み状地形の地

点で確認している。長径5.5m、短径3.5m程の概ね楕円形である。池の底を整地したものとみられる地山粘土塊主体の最大層厚0.4m程の整地層があり（図6 F F' -40層）、その上面に拳大ほどの礫が多数混じっていた。また、整地層の底から壁が緩やかに立ち上がった際に、池の汀の護岸になるとみられる0.2m程の石の集中があり、その外側に裏込めとみられる掘り方を確認した（図6 F F' -41層）。本年度調査のL区は、この池状遺構の南端部である。再度L区の東壁断面を確認した結果、池状遺構は地山層上面から掘り込まれており、平場の造成層との新旧関係は確認できなかった。遺物は出土しておらず、年代は未詳である。

### （3）出土遺物（図3、表4・5、写真図版3-3）

本年度新たに出土したものはないが、25・26年度の調査で出土したものを全て表に記載した。国産陶磁器が29点、縄文土器が2点、石器とその剥片2点、木片1点が出土している。造成層から国産陶磁器5点が出土した以外は全て遺構外からである。

国産陶磁器（表4-1）はほとんどが近世のものである。産地は肥前が多く、大堀相馬が少数であるほか、産地不明（在地産か）のものもある。器種は碗、皿、甕、播鉢等の日常雑器である。造成層の最下層から出土した25（図3-1）は肥前産磁器皿で17世紀前半のものである。

縄文土器はいずれも小片で全体形は不明であるが、表5-1-1は0段多条の特徴から縄文前期のものと思われる。

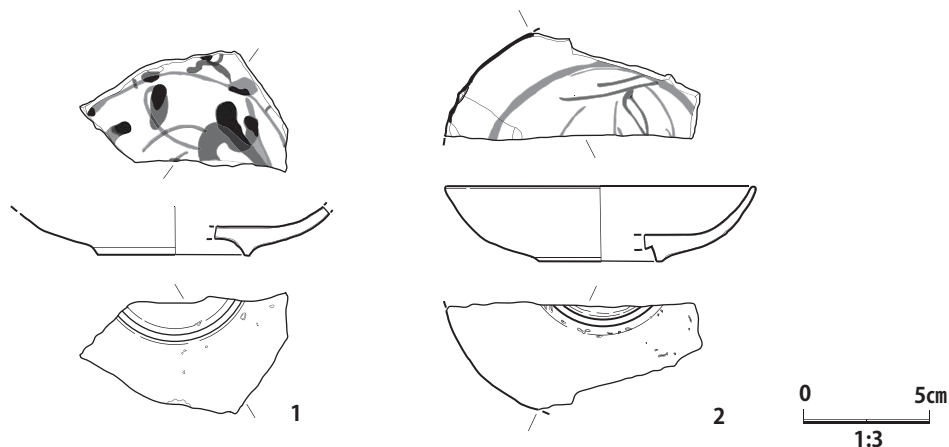


図3 出土遺物

### まとめ

継続調査の3年目にあたる今回の調査では、25・26年度調査で新旧2時期あるとしていた最大平場の造成層が、17世紀以降に行われた造成であると結論付けた。

平場上の建物は、長軸3間、短軸1間の掘立柱建物が平場造成の後に建てられたことを確認した。しかし、その規模は平場に比べて小さく、軸方向も異なる。原位を保っていると思われる石材3があり、その下に造成層が入っていることから、平場造成後に礎石建物が存在した可能性が高いが、痕跡が少なく、規模を確定することはできなかった。

（二階堂）

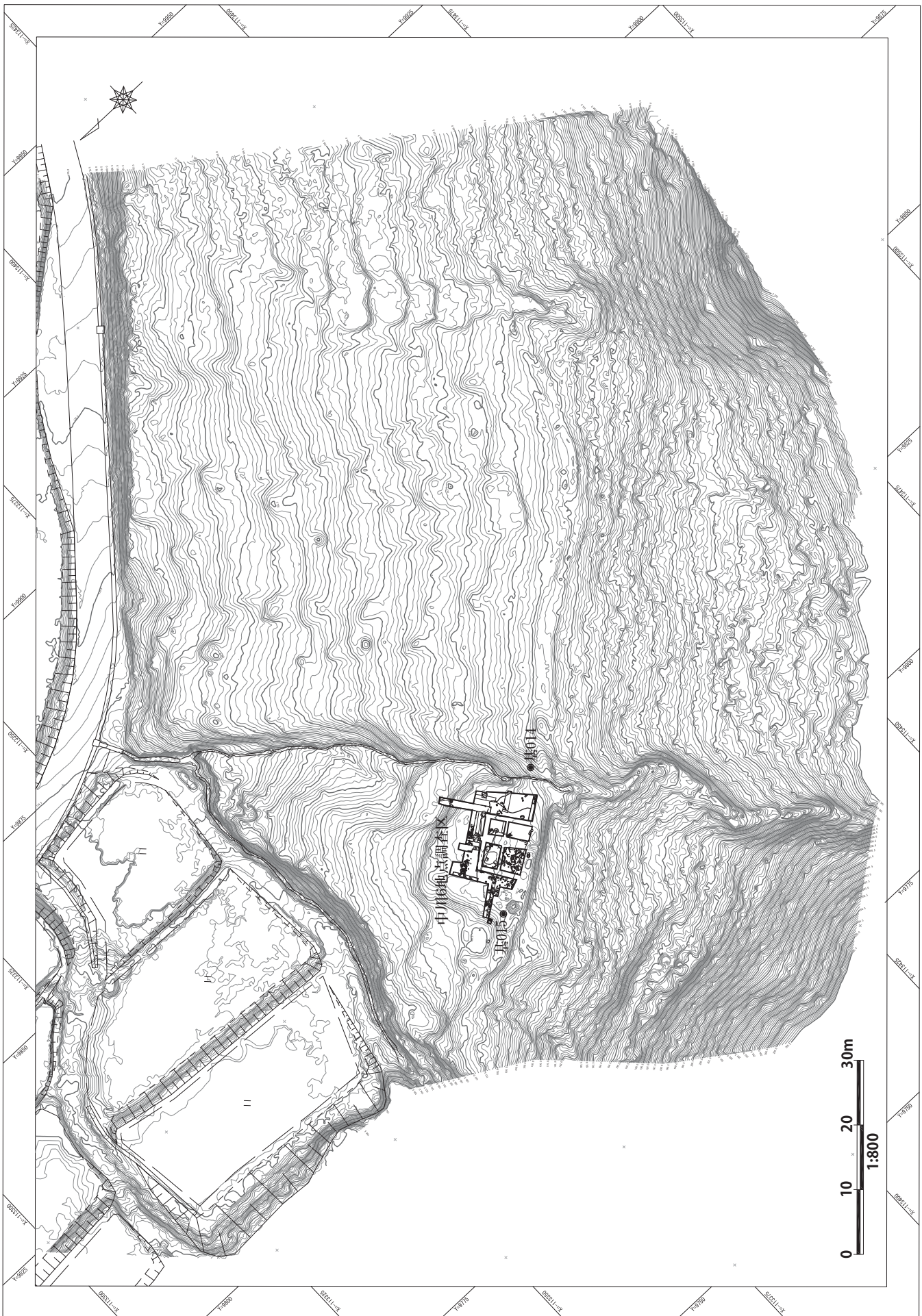


图4 白山社及び駒形根神社(中川6地点)調査区位置図





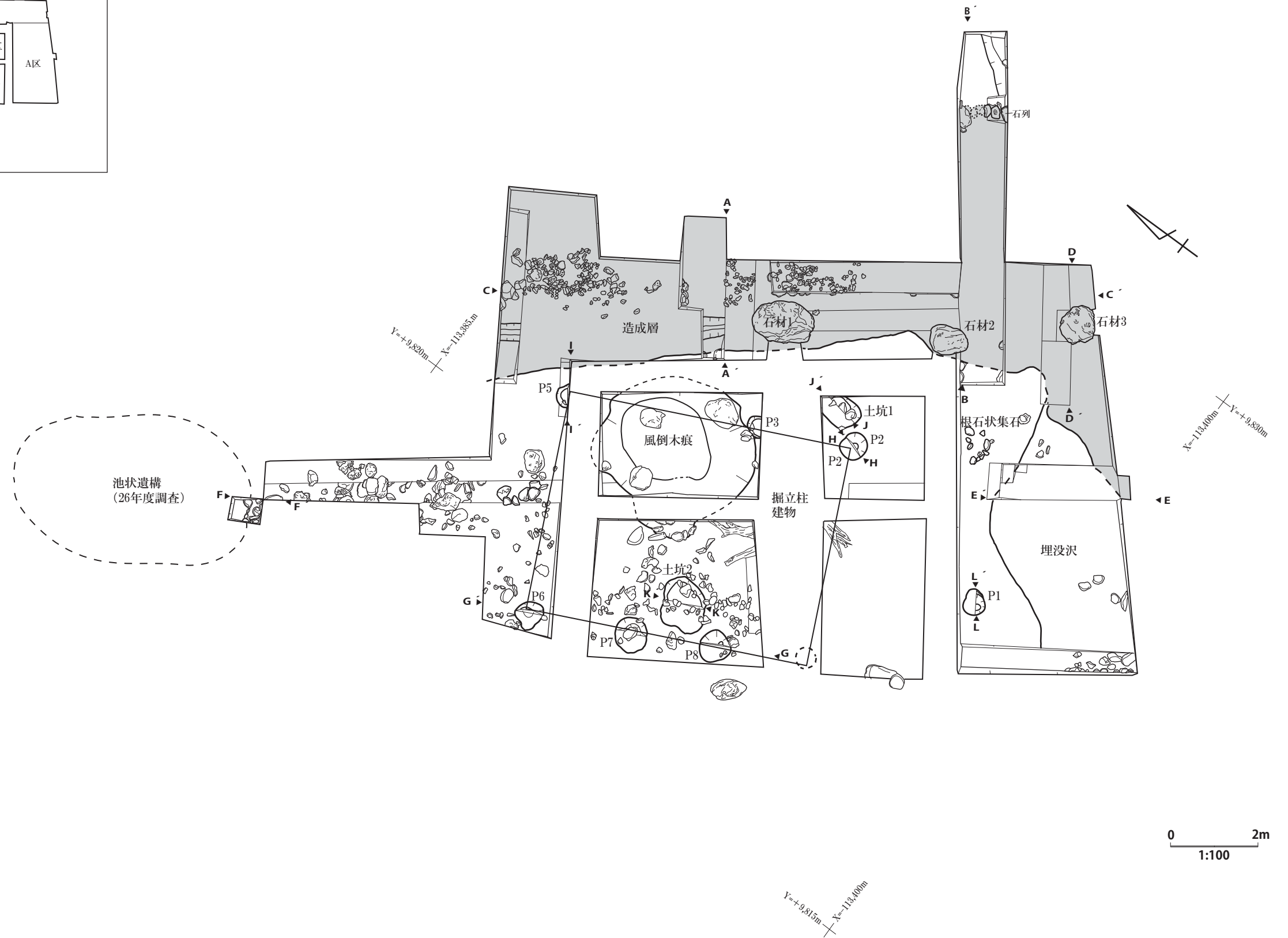
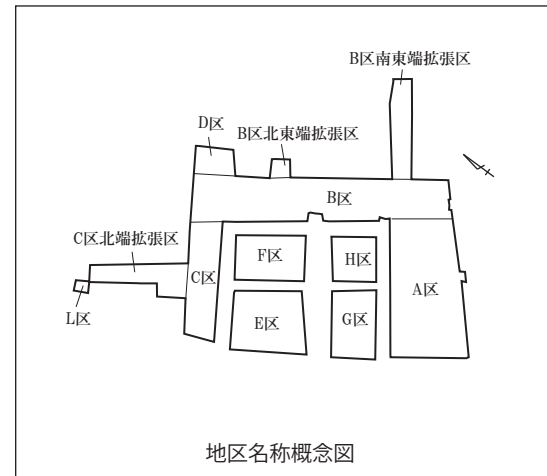
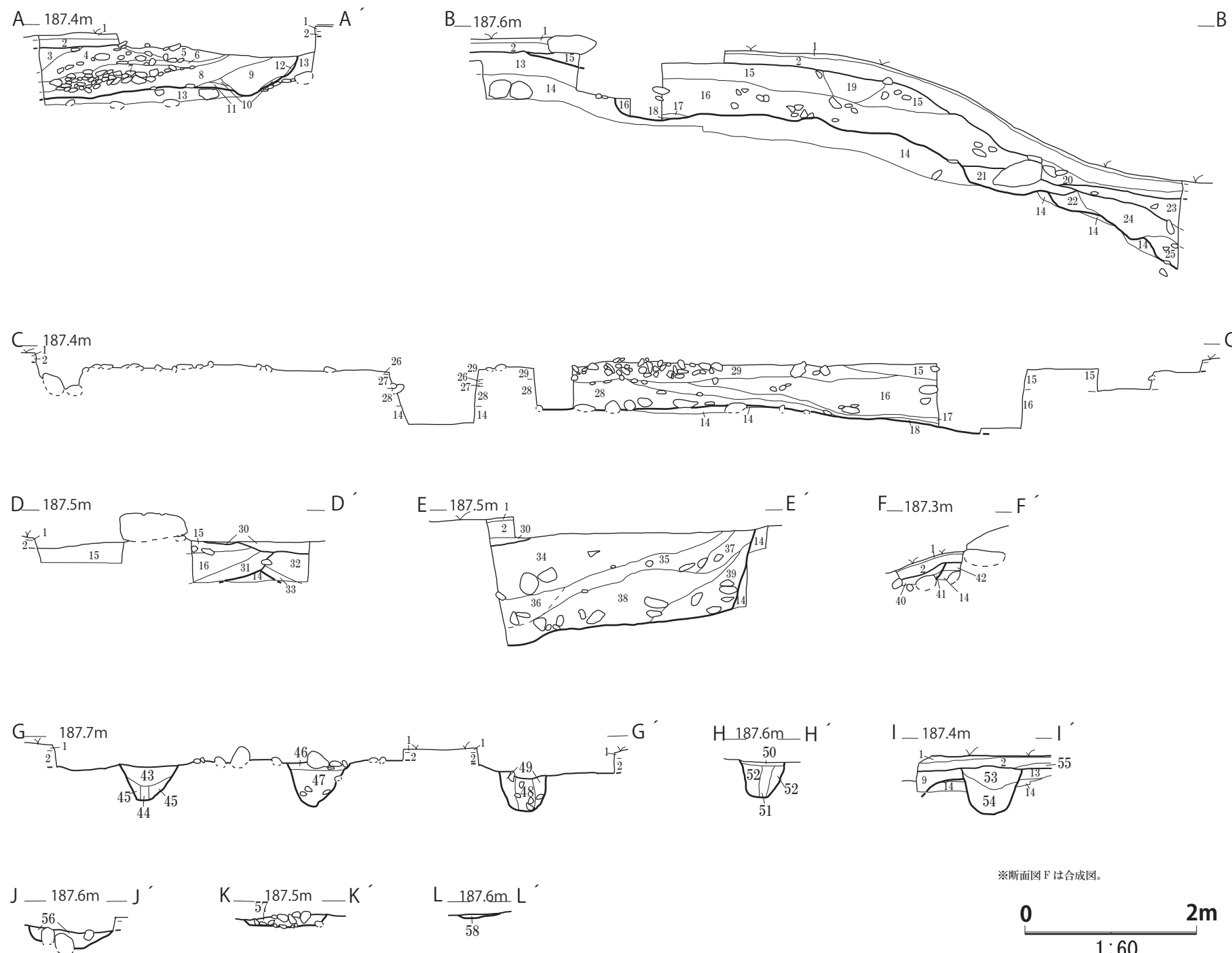


図5 白山社及び駒形根神社(中川6地点)遺構配置図



断面図ABCDEFGHIJKL

- 1 10YR3/2黒褐色シルト、炭化物を含む、粘性あり、しまなし。草の根が多く入る。現表土。基本土層Ⅰ層。
- 2 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を含む、粘性あり、しまややなし。草の根が多く入る。自然堆積。近世陶磁器が出土する。基本土層Ⅱ層。
- 3 10YR3/2黒褐色シルトに地山塊(径0.5～30cm大)均一に20～30%混。炭化物を微量含む、粘性あり、しまややなし。近世以降の造成層。
- 4 地山塊主体で10YR3/3暗褐色シルトが少量混。砂質分を含む。大小の礫が多数入る。炭化物を微量含む、粘性あり、しまややなし。近世以降の造成層。
- 5 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5～1cm大)均一に微量混。砂質分を含む。小礫が多数入る。炭化物を微量含む、粘性あり、しまややなし。近世以降の造成層。
- 6 10YR2/2黒褐色シルトに地山塊(径0.5～20cm大)均一に少量混。炭化物を微量含む、粘性あり、しまややあり。近世以降の造成層。
- 7 地山塊主体で10YR3/3暗褐色シルトが少量混。大小の礫を多数含む。炭化物を微量含む、粘性あり、しまなし。近世以降の造成層。
- 8 10YR3/1黒褐色シルトに地山塊(径0.5～3cm大)均一に10～20%混。炭化物を微量含む、粘性あり、しまあり。近世以降の造成層。
- 9 10YR2/2黒褐色シルトに地山塊(径0.5～5cm大)壁際に多く微量混。炭化物を微量含む、粘性あり、しまあり。17世紀前半の磁器片が出土。
- 10 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5～1cm大)均一に30～40%混。炭化物を微量含む、粘性あり、しまあり。地山崩壊層？。
- 11 地山に10YR3/1黒褐色シルトが筋状に入る。木の根の痕跡？。
- 12 10YR3/1黒褐色シルトに地山塊(径0.5～5cm大)均一に50～60%混。炭化物を微量含む、粘性あり、しまあり。地山崩壊層？。
- 13 10YR4/4褐色シルト。岩石粒？(径0.5～3cm大)一部に微量入る。粘性あり、固くまる。上部に黒褐色土が混じる。地山層。基本土層Ⅲa層。
- 14 10YR5/6黄褐色シルト。小礫が入る。砂質分を含む。マンガング粒を多く含む。粘性あり、固くまる。地山層。基本土層Ⅲb層。
- 15 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～20cm大)均一に40～50%混。大小の礫が入る。炭化物を含む、粘性あり、しまあり。近世以降の造成層。
- 16 10YR3/2黒褐色シルトに地山塊(径0.5～10cm大)均一に10～20%混。大小の礫が入る。炭化物を含む、粘性あり、しまあり。近世以降の造成層。
- 17 10YR2/2黒褐色シルトに地山塊均一に微量混。有機率分を多く含む。炭化物を微量含む、粘性あり、しまややあり。近世以降の造成層。
- 18 10YR2/2黒褐色シルトに地山塊(径0.5～10cm大)均一に30～40%混。炭化物を微量含む、粘性あり、しまややあり。近世以降の造成層。
- 19 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5～10cm大)均一に10～20%混。大小の礫が入る。炭化物を微量含む、粘性あり、しまあり。掘り込み？。
- 20 10YR3/2黒褐色シルト。大小の礫が入る。炭化物を少量含む、粘性あり、しまややなし。
- 21 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5～5cm大)均一に10～20%混。砂質分を含む。大小の礫が入る。炭化物を少量含む、粘性あり、しまややなし。石列の掘り方。
- 22 10YR4/3にぶい黄褐色シルト。砂質分を多く含む。大小の礫が入る。炭化物を微量含む、粘性あり、しまややなし。地山崩壊層？。
- 23 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5～10cm大)均一に30～40%混。砂質分を含む。大小の礫が入る。炭化物を少量含む、粘性あり、しまややなし。近世以降の造成層。
- 24 10YR3/2黒褐色シルトに地山塊(径0.5～5cm大)上位に多く10～20%混。砂質分・有機質分を多く含む。炭化物を含む。粘性あり、しまややあり。近世以降の造成層。
- 25 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5～3cm大)上位に多く少量混。砂質分を多く含む。炭化物を少量含む、粘性強い、しまあり。旧表土層？。
- 26 10YR2/2黒褐色シルトに地山塊(径0.5～20cm大)均一に少量混。炭化物を微量含む、粘性あり、しまややあり。近世以降の造成層。
- 27 地山塊主体で暗褐色シルトが少量混。大小の礫が多数入る。炭化物を微量含む、粘性あり、しまなし。近世以降の造成層。
- 28 10YR3/1黒褐色シルトに地山塊(径0.5～3cm大)均一に10～20%混。炭化物を微量含む、粘性あり、しまあり。近世以降の造成層。
- 29 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5～1cm大)均一に微量混。砂質分を含む。小礫が多数入る。炭化物を微量含む、粘性あり、しまややなし。近世以降の造成層。
- 30 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5～10cm大)均一に5～10%混。大小の礫が入る。炭化物を含む、粘性あり、しまややあり。近世以降の造成層。
- 31 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5～5cm大)均一に10～20%混。炭化物を微量含む、粘性あり、しまあり。地山崩壊層？。
- 32 10YR2/2黒褐色シルト。砂質分を含む。大小の礫が入る。炭化物を微量含む、粘性あり、しまあり。沢の自然埋没層。
- 33 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5～3cm大)均一に少量混。砂質分多く含む。炭化物微量含む。粘性あり、しまあり。地山崩壊層？。
- 34 10YR2/3黒褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色砂が所々に少量入る。砂質分を多く含む。大小の礫が入る。炭化物を微量含む、粘性あり、しまあり。沢の自然埋没層。
- 35 10YR1.7/1黒色シルト。砂質分を少量含む。有機質分を多く含む柔らかい土。炭化物を微量含む。粘性あり、しまややなし。沢の自然埋没層。
- 36 10YR3/3暗褐色砂に10YR1.7/1黒色シルトが一部に少量混。砂質分を多く含む。炭化物を少量含む、粘性あり、しまあり。沢の自然埋没層。
- 37 10YR3/2黒褐色シルトに地山塊(径0.5～10cm大)均一に40～50%混。砂質分を含む。炭化物を少量含む、粘性あり、しまあり。地山崩壊層？。
- 38 10YR2/3黒褐色粘性シルト。砂質分を少量・有機質分を多量に含む。大小の礫が多数入る。炭化物を微量含む、しまあり。沢の自然埋没層。
- 39 10YR6/4にぶい黄褐色粘性シルト主体で10YR3/3暗褐色シルトが下位に多く20～30%混。炭化物を微量含む、粘性あり、しまあり。地山崩壊層？。
- 40 10YR6/4にぶい黄褐色粘土の地山塊主体で10YR4/3にぶい黄褐色シルトが端部に多く少量混。炭化物を微量含む、粘性強し、しまあり。旧池底の整地層。
- 41 10YR3/2黒褐色粘性シルトに地山塊(径0.1～3.0cm大)均一に20～30%混。砂質分を含む。炭化物を微量含む、粘性あり、しまあり。旧池の汀石の裏込土。
- 42 地山主体で10YR3/2黒褐色シルトが均一に混。炭化物を少量含む、粘性あり、しまあり。地山の漸移層？。
- 43 10YR3/3暗褐色シルト。大小の礫が多数入る。地山塊(1.0～3.0cm大)均一に5～10%混。炭化物を少量含む、粘性あり、しまあり。Pit8の埋土。
- 44 10YR4/1褐灰粘土。地山塊(0.1～0.5cm大)均一に微量混。炭化物を微量含む、しまあり。Pit8の埋土。
- 45 10YR3/2黒褐色シルト。大小の礫が入る。地山塊(0.1～0.5cm大)均一に微量混。炭化物を少量含む、粘性強い、しまあり。Pit8の埋土。
- 46 10YR3/3暗褐色シルト。大小の礫が入る。炭化物を微量含む、粘性あり、しまあり。Pit7の埋土。
- 47 10YR3/2黒褐色シルト。地山塊(0.1～5.0cm大)均一に3～5%混。炭化物を少量含む、粘性あり、しまあり。Pit7の埋土。
- 48 10YR2/1黒色粘土。地山塊(0.1～0.5cm大)均一に微量混。しまあり。炭化物を微量含む。Pit6の掘り方。
- 49 10YR3/2黒褐色シルト。地山塊(0.1～1.0cm大)均一に微量混。炭化物を少量含む、粘性あり、しまあり。Pit6の掘り方。
- 50 10YR4/3にぶい黄褐色シルト。砂質分を微量含む。炭化物を微量含む、粘性あり、しまあり。Pit2の埋土。
- 51 10YR4/2灰黄褐色シルト。炭化物を微量に含む、粘性あり、しまややなし。砂質分を含む。Pit2の掘り方。
- 52 10YR4/5にぶい黄褐色シルト。地山塊(0.1～1.0cm)均一に微量含む。炭化物を含む、粘性あり、しまあり。Pit2の掘り方。
- 53 10YR3/2黒褐色シルトに地山塊(径0.5～20cm大)一部に20～30%混。炭化物を含む、粘性あり、しまややなし。Pit5の埋土。
- 54 10YR3/1黒褐色シルトに地山塊(径0.5～3cm大)均一に微量混。炭化物を少量含む、粘性あり、しまややあり。Pit5の埋土。
- 55 10YR4/2灰黄褐色シルトに地山塊(径0.5～3cm大)均一に20～30%混。砂質分を多く含む。炭化物を微量含む、粘性あり、しまややなし。
- 56 10YR4/3にぶい黄褐色シルト。大小の礫が入る。炭化物を含む、粘性あり、しまあり。土坑1の埋土。
- 57 10YR4/1褐灰粘土に地山塊(0.1～0.5cm大)均一に微量混。炭化物を微量含む、しまあり。土坑2の埋土。
- 58 10YR3/2黒褐色シルト。砂質分を含む。地山塊(0.1～5.0cm)均一に10～20%混。炭化物を含む、粘性あり、しまあり。Pit1の埋土。

※断面図 F は合成図。

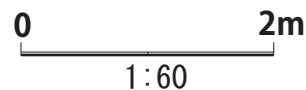


図6 白山社及び駒形根神社(中川6地点)土層断面図

## 4. 梅木田遺跡の調査

本調査は、梅木田遺跡の内容を確認するためのものであり、調査地点は、一関市巖美町字中川32-1に所在する(図2-8)。

遺跡には、西から最西部平場、西部上段平場、西部下段平場、中央部平場、東部平場の5カ所の平場がある(図7)。このうち平成12・25・26年度に調査した中央部平場は、丘陵裾部を段切りして平場が造成されていること、段切りと平場の接点に区画溝が掘られ、段切り造成の下段平場を活用し、掘立柱建物、柱列、柱穴群などからなる居住域を確認した。その範囲は、北は段切りと区画溝(溝5)、東は柱穴の分布密度が粗となり、その限界に位置する柱列群、南は南側を区画した施設である柱列5・6付近、西は明瞭な区画施設をもたないが、沢が限界であると考えられる。

掘立柱建物をはじめ、柱列、柱穴群、溝などの遺構群は、4期(古い順に1・2・3a・3b期)に細別される。3b期に属する掘立柱建物4を構成するP203、3a段階に属する掘立柱建物2を構成するP205の掘方埋土から近世磁器、1期に属する溝9の埋土から17世紀末から18世紀末までの肥前産陶器が出土しており、いずれの時期も近世であることが判明した。

しかし、これまでの調査で掘立柱建物、柱列として組み合わせることを確認した以外の柱穴については未詳な点が多く、25年度の調査で出土したりゅうせんようけいせいじしのぎれんべんもんわん龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗(13世紀中頃～後半)の年代に合致する遺構を抽出することはできていない。26年度は、A区(西部上段平場)・B区(西部下段平場)の調査を行い、B区では柱列を含む柱穴群を確認した。しかし、トレンチ調査ということもあり、未詳な点が多く残された。

これを踏まえ本年度の調査は、A・B区周辺でどのように遺構が展開し、土地が利用されているのかを解明することを目的とした。最初に、草地の刈り払いを行い、調査区を設定した。その後、土層の堆積状況および遺構の有無を確認するため、掘削を行った。調査期間は4月22日から8月25日まで、調査面積は約474m<sup>2</sup>(A区:約162m<sup>2</sup>、B区:約312m<sup>2</sup>)である。調査終了後は残土を用いて埋め戻し、原状を復帰した。

### (1) 基本土層 (図9-AA'、写真図版4-4)

ここでは、A区北壁から、代表的な4つの層を挙げる。

Ⅲ層(1層) 10YR2/3黒褐色粘土質シルト。10YR2/2黒褐色粘土質シルト小～中ブロック少量、炭化物粒・焼土粒極めて微量含む。粘性中。しまりやや弱。旧畑耕作土。

Ⅵ層(2層) 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。炭化物粒・焼土粒極めて微量含む。粘性極めて強。しまり強。沢および自然窪地堆積土。

Ⅶ層(3層) 10YR2/1黒色粘土質シルト。明瞭な混入物なし。粘性極めて強。しまり強。沢および自然窪地堆積土。

XV層(7層) 10YR5/6黄褐色粘土質シルト。小～大礫をまばらに含む。粘性極めて強。しまり強。地山。

### (2) 確認した遺構と遺物

今回確認した遺構(図8)は、A区:沢1条、B区:掘立柱建物1棟、柱列2条、柱穴群、溝2条、土坑2基、小溝群1群(小溝11条)、沢1条である。

なお、B区の柱穴群の一部、溝、土坑については遺構プランを確認しただけで掘り下げをしていない。

## A区

沢（自然流路、図9・10、写真図版4-1・5-2・5-5・6-1・8-6）

26年度のトレンチ調査で断ち割りを行い、最大上幅17.0m、最大深さ1.0mであることを確認している。26年度調査B区で溝12としたものは沢の本体、土坑1としたものは沢が土坑状に落ち込む部分であることを明らかにした。A区の北側およびB区の南側は調査区外に延びており、長さは30.0m以上、最小上幅4.4mである。B区のセクションラインA・Bでの断面形状は皿状を呈し、確認面からの深さは0.4mである。遺物は、上層から剥片、下層から石鏃が出土しているが、いずれも流入によるものであり、沢の埋没年代を示すものではない。

※なお、26年度調査の調査区北壁で確認し柱穴としたものについては、自然木痕（図8、写真図版5-1）であると判断した。柱穴の場合、残存している木質の形状に沿った不整形のプランが不自然、平面・断面ともに柱痕跡と掘方埋土の差異が未確認、埋土のしまりが極めて弱い、確認できた3基以外周辺に展開しないからである。

## B区

掘立柱建物6（図10・11、写真図版6-1～5・7-1～5）

長軸2間、短軸2間の東西棟の側柱掘立柱建物である。26年度調査の際、柱列8の最も西側を構成するとした柱穴が、本建物の北東隅柱であることを明らかにした。方向は南側柱列で、N-29°-Eである。長軸6.5m、短軸4.5m、西側柱列の柱間は北から1.7m・2.8m、北側柱列の柱間は西から2.7m・3.8m、東側柱列の柱間は北から2.2m・2.1m、南側柱列の柱間は西から2.3m・3.9mを測る。P401・418では柱痕跡がみられるが、そのほかは抜き取られている。柱穴の掘方は、P420・422は円形に近いが、他はすべて楕円形で、規模は最小のP417で0.4m×0.6m、最大のP401で0.7m×0.9mである。各柱穴からの出土遺物はない。この建物は、柱列8、26年度に調査した掘立柱建物2～4、柱列6と方向を共にする。

柱列8（図10・12、写真図版6-1）

5穴4間分を確認した。26年度調査の際、6穴5間であるとしたが、今回の調査で、その最も西側を構成するとした柱穴が掘立柱建物6の北東隅柱であることを明らかにした。方向は軸線で、N-55°-Wである。全長7.8m、柱間は西から1.7m・2.4m・2.3m・1.4mを測る。全ての柱穴で柱痕跡がみられる。柱穴の掘方は、P404・406がほぼ円形、P402・403・405が楕円形である。規模は最小のP404で0.5m×0.5m、最大のP402で0.6m×0.7mで、各柱穴からの出土遺物はない。この柱列は、掘立柱建物6、26年度に調査した掘立柱建物2～4、柱列6と方向を共にする。

柱列9（図10・12、写真図版6-1・7-6～8・8-1～2）

4穴3間分を確認した。方向は軸線で、N-37°-Eである。全長3.0m、柱間は北から1.0m、1.0m、1.0mを測る。全ての柱穴で柱が抜き取られている。柱穴の掘方は、いずれもほぼ円形である。規模は全て0.4m×0.4mで、各柱穴からの出土遺物はない。この柱列は、掘立柱建物6、柱列8、26年度に調査した掘立柱建物2～4、柱列6と直交する。

小溝群（図10、写真図版6-1・8-3～5）

小溝を11条並んだ状態で確認した。方向は軸線で、N-50°-Wである。長さ1.8～3.0m、幅0.2～0.4m、深さ0.04～0.08m、断面形状は上部が開くU字形ないし皿状を呈する。遺物は出土していない。畑の耕作にともなう天地返しの際の痕跡である。

出土遺物（表4-2・5-2、写真図版8-7～8）は、遺構からの出土はない。A区の風倒木痕から剥片1点、基本層Ⅲ層（旧畑耕作土）から磁器片1点、表土から磁器片1点、石匙1点、剥片1点、攪乱から陶器片1点、B区の沢埋土下層から石鏝1点、同上層から剥片2点、表土から陶磁器片18点、土器1点、石製品2点、金属製品1点、石鏝1点、27年度調査排土から陶磁器片10点の合計42点が出土した。

詳細は遺物観察表および写真図版に掲載した。

排土・基本層Ⅰ層（表土）からは、25・26年度調査と同様に江戸時代を中心とした時期の陶磁器類が出土しており、今回の調査地点が、「ウメノキ（梅木）」と呼ばれる屋敷であったとの地元の伝承を裏付ける。「ウメノキ」屋敷の廃絶後、畑地として耕作された際に屋敷で用いられていた陶磁器類が破碎され、旧畑耕作土や表土に混在したものと考えられる。

### （3）まとめ

調査の結果、江戸時代後期（あるいは明治期まで存続する）と考えられる掘立柱建物と、柱列からなる屋敷が営まれていたことが判明した。

排土・表土から江戸時代（17世紀中頃）から近代までの陶磁器が出土している。特に17世紀末から18世紀末までの肥前産、18・19世紀の大堀相馬産の壺・碗・皿など日常雑器が多いことから、屋敷で使用されたものであったと考えられる。遺構からの出土は皆無で、屋敷の年代を断定できないが、17世紀後半から近代までに存続していた蓋然性が高い。

遺跡内にある5つの平場のうち、未調査である東部平場にどのように遺構が展開し、土地が利用されているかを明らかにすることが課題である。

（山川）



图7 梅木田遺跡調査区位置図

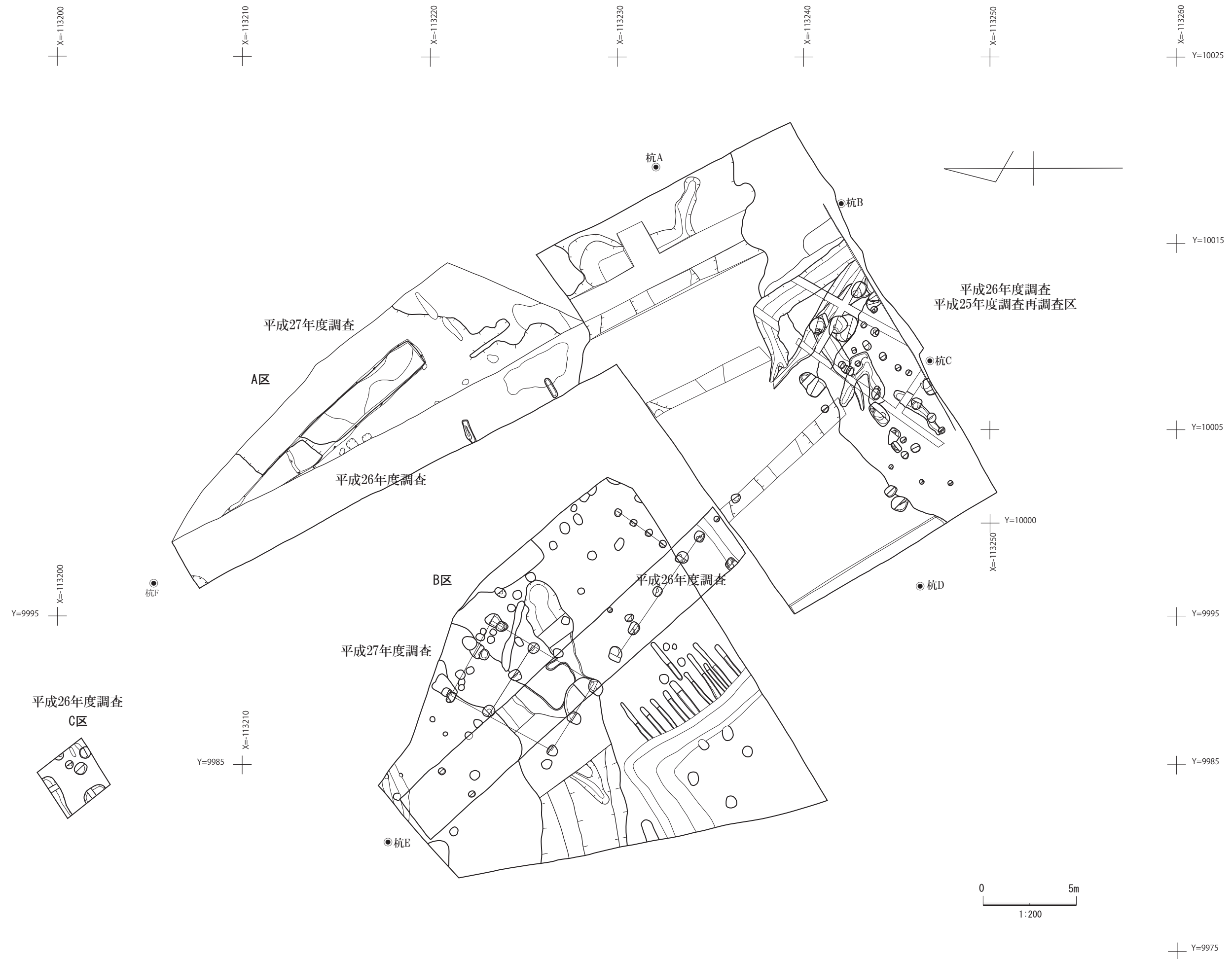
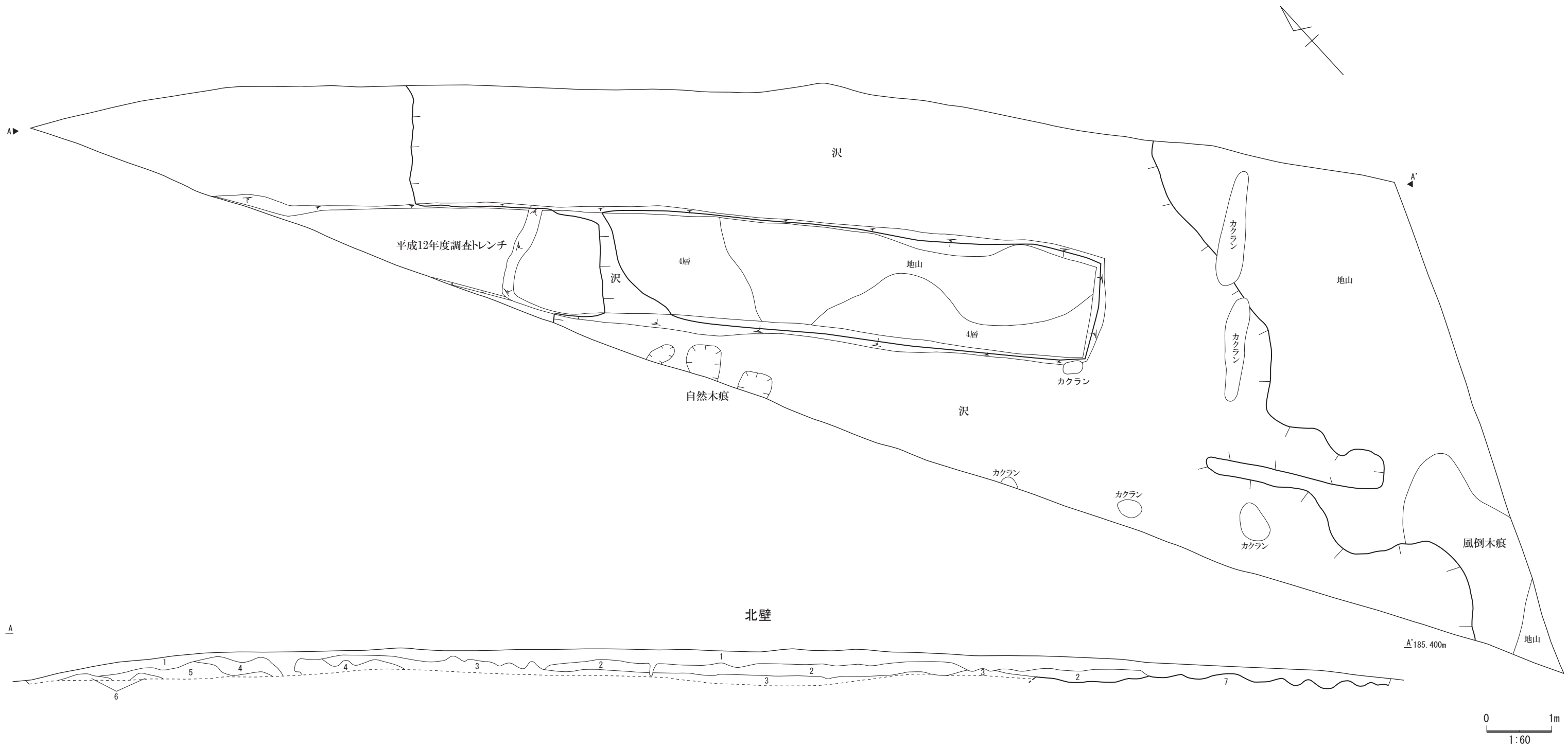


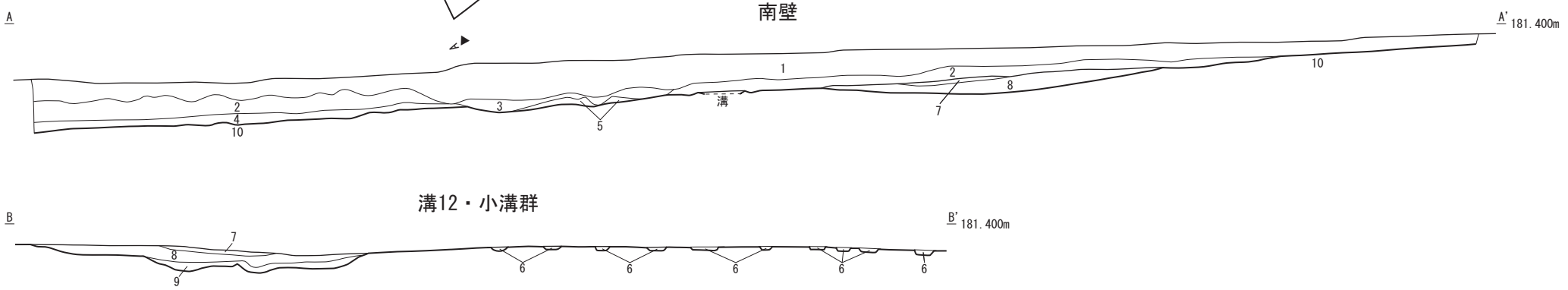
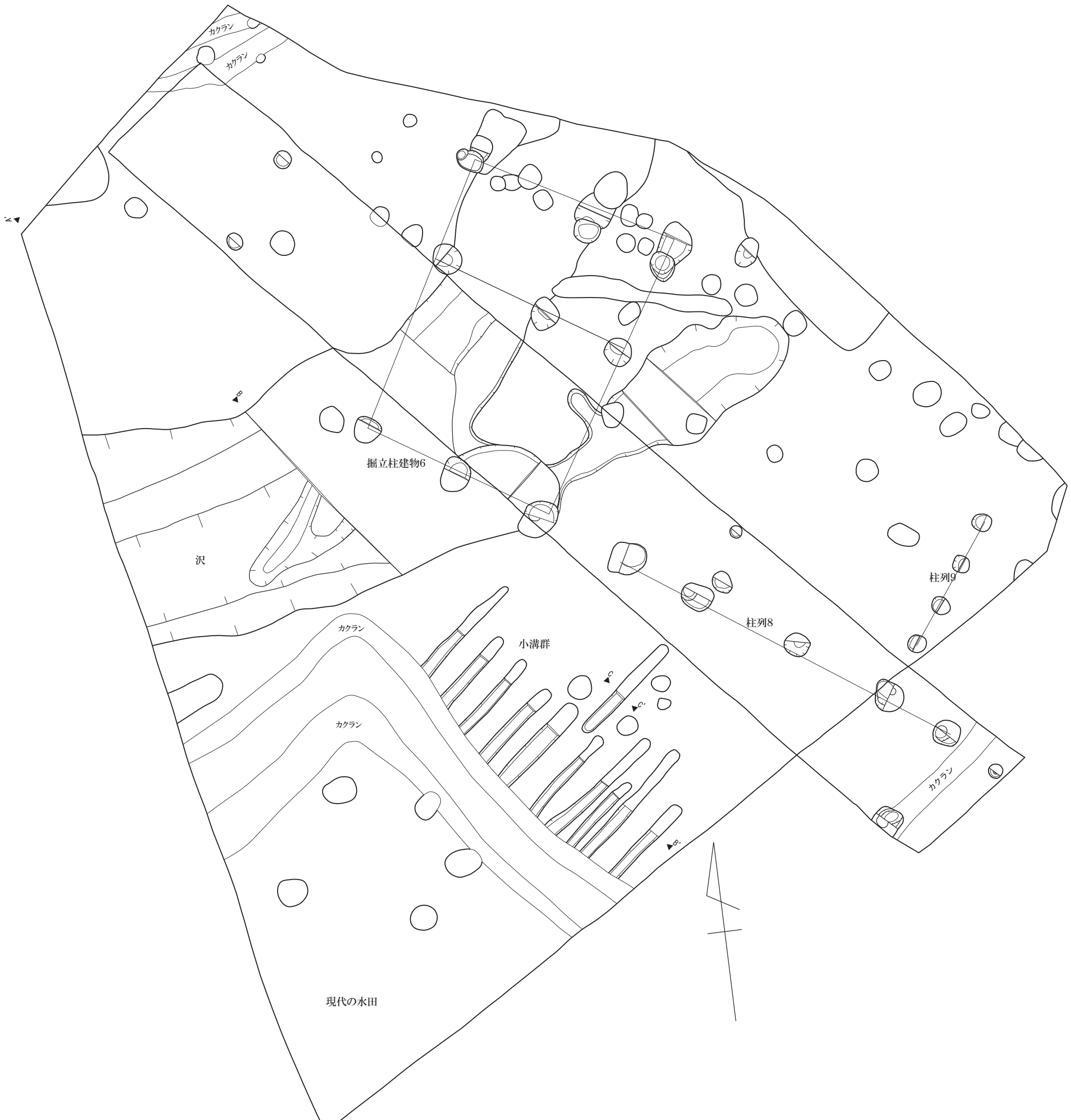
图8 梅木田遺跡平成27年度調査区遺構全体図



- 1 10YR2/3黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまりやや弱。下部に10YR2/2黒褐色粘土質シルト小・中ブロック少量、炭化物粒・焼土粒極めて微量含む。旧畑耕作土。平成26年度調査基本土層Ⅲ層。
- 2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。粘性極めて強。しまり強。炭化物粒・焼土粒極めて微量含む。平成26年度調査基本土層Ⅵ層。
- 3 10YR2/1黒色粘土質シルト。粘性極めて強。しまり強。下部は5と漸移的。平成26年度調査基本土層Ⅶ層。
- 4 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。10YR4/4褐色粘土質シルト粒を均一に少量、同極小・小ブロック微量、炭化物粒・焼土粒極めて微量含む。平成26年度調査基本土層Ⅷ層。
- 5 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。粘性極めて強。しまり中。10YR4/4褐色粘土質シルト粒を均一に少量含む。14より黒味を帯びる。平成26年度調査基本土層Ⅹ層。
- 6 10YR3/4暗褐色粘土質シルト。粘性極めて弱。しまり極めて強。地山中～極大ブロック極多量含む。平成26年度調査基本土層ⅩⅠ層。
- 7 10YR5/6黄褐色粘土質シルト。粘性極めて強。しまり強。小～大礫をまばらに含む。地山。平成26年度調査基本土層ⅩⅤ層。

図9 平成27年度調査A区平面図・土層断面図





- 1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。粘性ややあり。しまり極めて強。地山小～大ブロック少量含む。平成26年度調査基本土層IV層。
- 2 10YR4/4褐色シルト。粘性なし。しまり極めて強。地山小～大ブロック微量含む。平成26年度調査基本土層V層。
- 3 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。地山大ブロック少量含む。現代の水田畦畔間の溝。
- 4 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。粘性強。しまり極めて強。地山極小・小ブロック少量含む。現代の水田耕作土。
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト。粘性極めて強。しまり極めて強。地山小・中ブロック少量含む。現代の水田畦畔。
- 6 10YR3/2黒褐色粘土質シルト。粘性弱。しまり極めて強。炭化物粒極めて微量。地山小～大ブロック多量含む。小溝群の小溝埋土。
- 7 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。粘性やや弱。しまり中。明瞭な混入物なし。溝12埋土最上層。
- 8 10YR2/1黒色粘土質シルト。粘性強。しまり強。壁際に10YR3/3暗褐色砂を屑状に含む。溝12埋土上層。
- 9 10YR2/1黒色粘土質シルト。粘性強。しまり強。壁際に10YR3/3暗褐色砂を屑状に含む。溝12埋土下層。
- 10 10YR5/6黄褐色粘土質シルト。粘性極めて強。しまり強。小～大礫をまばらに含む。地山。

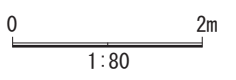
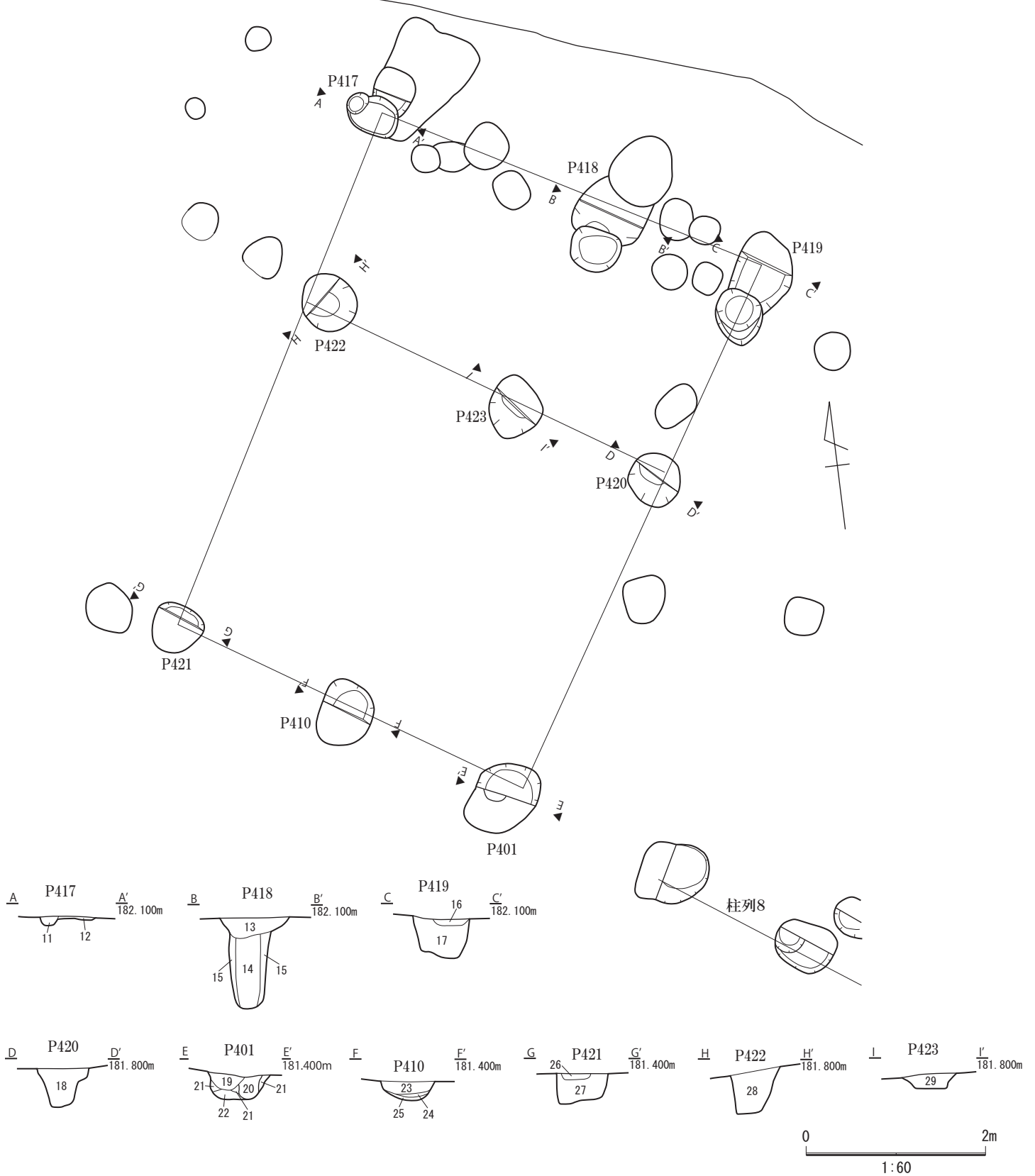
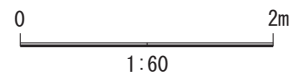
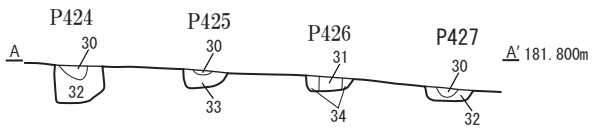
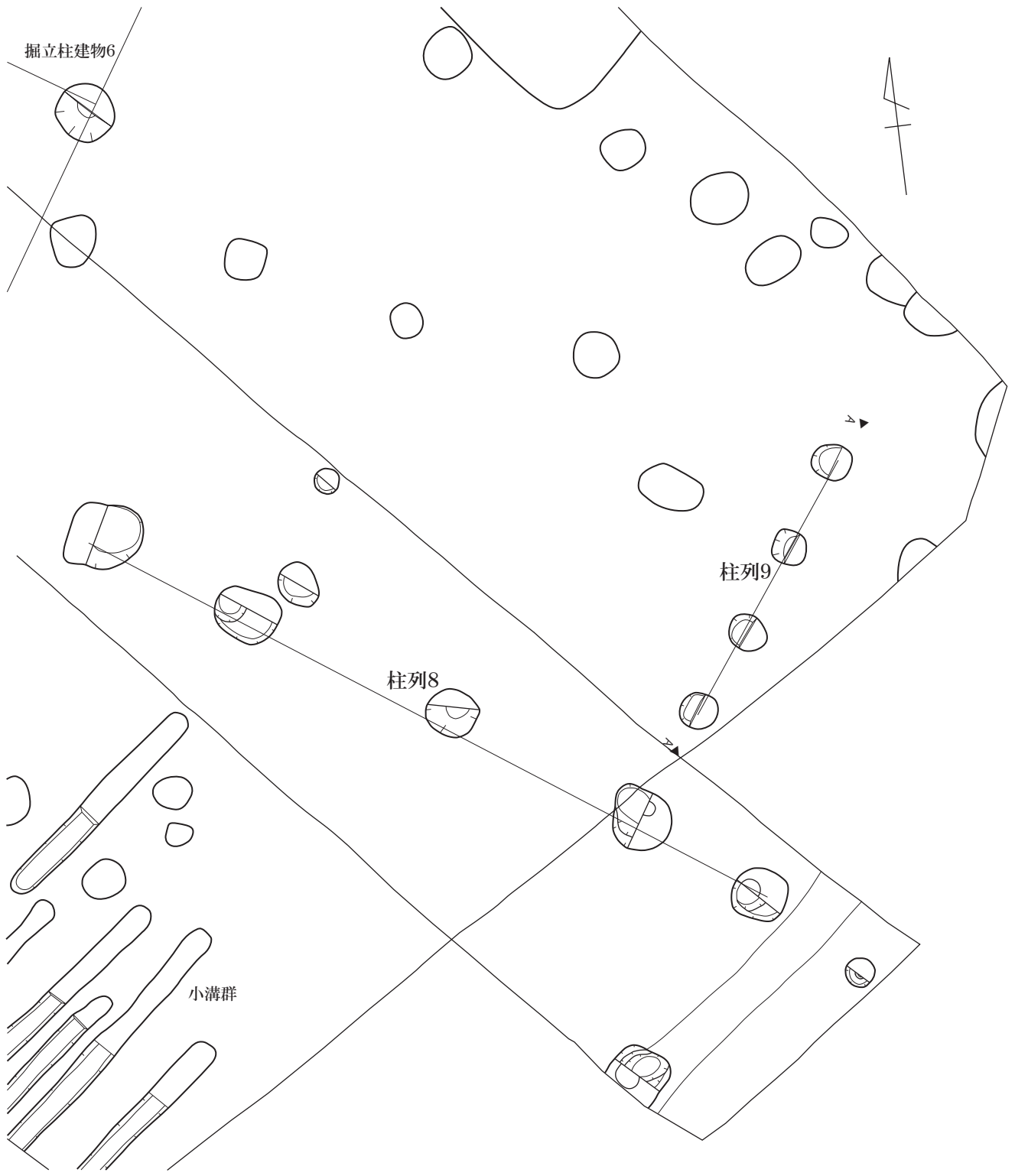


図10 平成27年度調査B区平面図・土層断面図



- 11 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。粘性極めて弱。しまり極めて強。地山小・中ブロック少量含む。P417 柱痕跡。  
 12 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性弱。しまり極めて強。10YR2/2 黒褐色粘土質シルト小ブロック少量、地山小・中ブロック多量含む。P417 掘方埋土。  
 13 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。10YR2/2 黒褐色粘土質シルト小・中ブロック少量、地山中・大ブロック極めて多量含む。P418 柱抜取穴。  
 14 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性強。しまり中。10YR2/2 黒褐色粘土質シルト小・中ブロック少量、地山小～大ブロックやや多く含む。P418 柱痕跡。  
 15 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性強。しまり中。10YR2/2 黒褐色粘土質シルト小・中ブロック少量、地山中～極大ブロック極めて多量含む。P418 掘方埋土。  
 16 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。10YR2/2 黒褐色粘土質シルト中・大ブロック、地山小～大ブロック少量含む。P419 埋土上層。  
 17 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。粘性やや強。しまり強。地山小～大ブロック極めて多量含む。P419 埋土下層。  
 18 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山小・大ブロック中量含む。P420 埋土。  
 19 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山小～大ブロック微量含む。P401埋土。  
 20 10YR2/1 黒色粘土質シルト。粘性やや強。しまりやや強。地山小～大ブロック中量、10YR3/1 黒褐色粘土質シルト小・中ブロック少量含む。P401柱痕跡。  
 21 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。10YR2/1 黒色粘土質シルト小・中ブロック・地山小・中ブロック少量含む。P401掘方埋土上層。  
 22 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト。粘性中。しまり極めて強。10YR2/1 黒色粘土質シルト小・中ブロック少量、地山大・極大ブロック極多量含む。P401掘方埋土下層。  
 23 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。粘性やや強。しまり中。地山極小・小・極大ブロック微量含む。P410埋土上層。  
 24 10YR2/1 黒色粘土質シルト。粘性強。しまり中。地山小・中ブロック少量含む。P410埋土中層。  
 25 10YR2/1 黒色粘土質シルト。粘性強。しまり強。10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト極めて多量含む。P410埋土下層。  
 26 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小・小ブロック極めて多量含む。P421埋土上層。  
 27 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性やや強。しまりやや強。地山小・中ブロック微量含む。P421埋土下層。  
 28 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。粘性やや強。しまり強。地山小・大ブロック多量含む。P422埋土。  
 29 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山小～大ブロック少量含む。P423埋土。

図11 掘立柱建物6平面図・土層断面図



- 30 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小ブロック微量含む。
- 31 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小ブロック微量含む。柱痕跡か。
- 32 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。地山小～大ブロック多量含む。
- 33 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。地山小～大ブロック多量、10YR2/2 黒褐色粘土質シルト小ブロック微量含む。
- 34 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。地山小～大ブロック多量、10YR2/2 黒褐色粘土質シルト小ブロック少量含む。

図12 柱列9平面図・土層断面図

## 5. 平泉野遺跡（若井原194-115地点）の調査

平泉野台地と呼ばれる丘陵の頂部は、標高258mの「オイノモリ」と標高251mの「ドウジヤマ」が連なる。この2つの丘の南側に沿って、東端の駒形根神社から西に向かう林道があり、さらに丘の間を南北に道が縦断する。調査地点は、道が交差する一関市巖美町字若井原194-115である（図2-39）。東南東約950mには駒形根神社が、南東約600mには白山社がある。

「オイノモリ」は「大犬の森」「狼の森」と伝えられ（一関市立本寺中学校1977）、その頂部には大犬を祀ったという石祠がある。また「ドウジヤマ」は地元の伝承によると簡略絵図にある「堂山」にあたる、とされている。

現地での調査期間は平成27年7月27日から11月25日まで、調査面積は348m<sup>2</sup>である。

利用した測量基準杭の成果は以下のとおりである。

基A 2-2 X=-113383.284、Y=+9119.723、H=228.623

基A 2-6 X=-113330.706、Y=+9125.603、H=233.039

### 1. 若井原194-115地点の調査

「オイノモリ」と「ドウジヤマ」の丘に囲まれた谷部分、2つの道が交差する地点の北西側に、南に開口して裾が広がる「U」字形の段切り区画があり、その内側の中心付近に2基の塚がある。全体的に南に向かって緩やかに傾斜する。区画は長辺約50m、短辺は北辺が約17mで内面積は約1,430m<sup>2</sup>である。塚は直径3m・高さ0.4m程で表面には石が集中する（写真図版9-1～2）。

調査地点の段切り地形は26年度踏査（一関市教育委員会2015）で、塚群は國學院大学の踏査（國學院大学1997）で発見されたが、発掘調査は未実施である。本年度、外側の道も含めた範囲の3次元地形測量およびトレンチでの発掘調査を実施した（図13）。

雑木等の刈り払い後に、地形測量を行い、段切り区画の中軸線を基準に、北東部に北からA・B区の調査区を設け（図14）、人力で表土を除去してその下の遺構を検出し、その一部に断ち割りを行って断面を観察した。

#### （1）基本土層

I層 10YR3/4暗褐色粘土質シルト。炭化物粒を少量含む。粘性ややあり。しまり弱。腐葉土を多量に含む。現表土。（図15-1層）

II層 10YR2/3暗褐色粘土質シルト。地山粒・炭化物粒・焼土粒を微量含む。粘性ややあり。しまり強。（図15-2層）

III a層 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒・炭化物粒・焼土粒を微量含む。粘性強。しまり強。自然科学分析を実施しており、放射性炭素年代測定の結果（8章参照）、近世以降に堆積したものであることがわかった。（図15-10層）

III b層 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒少量、炭化物粒・焼土粒を微量含む。粘性強。しまり極めて強。自然科学分析を実施しており、放射性炭素年代測定の結果（8章参照）、近世以降に堆積したものであることがわかった。また、この層の上面に白色の細かい砂が集中する部分があり、火山灰である可能性があったため、火山灰分析を実施した（7章参照）結果、否定された。（図15-11層）

III c層 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒・炭化物粒・焼土粒を極微量含む。粘性強。しまり極めて強。（図15-12層）

IV層 10YR2/1黒色粘土質シルト。炭化物粒を極微量含む。粘性強。しまり強。(図15-13層)

V層 10YR2/1黒色粘土質シルト。地山粒を極微量含む。粘性極めて強。しまり極めて強。縄文土器を包含する。(図15-14層)

VI層 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山小中塊をやや多く含む。粘性極めて強。しまり極めて強。地山漸移層。(図15-15層)

## (2) 遺構

**段切り造成** (図13・14、写真図版11-1～8) 山側を切り土して段を造り、内側の谷部を囲っている。段上の縁辺部は盛り土によって整形している。比高差は北辺中央部が最も大きく約1.0m、東辺の中央部付近にあたるB区南東が最も低く約0.4mである。比高差が最少の部分で造成層が途切れ、その2.5m以南は土塁状に盛り土されている(写真図版11-7)。北辺には層厚最大0.2m程の層が3層(図15A A'-7～9層)、B区南東端の土塁状の部分には層厚最大0.1m程の層が7層(図15E E'-43～49層)が、概ね水平に積み重なっている。造成層の各層間に自然堆積層は認められないことから、造成は切土した後、一気に行われたものと考えられる。

北辺部の一部の造成層は畑耕作痕によって壊されている。また溝2の上に乗ることから、それより新しい。遺物は出土していないが、自然科学分析を実施しており、放射性炭素年代測定の結果(8章参照)、近世以降に造成されたものであることがわかった。

**溝1** (図13・14) 段切り造成に伴うものであり、その内側縁辺部に沿って検出した。山側を切って、さらに0.1m程掘り込んでいる。この土が縁辺部の造成土に使われたと考えられる。壁の立ち上がりは緩やかで、埋土は自然堆積である。遺物は出土していない。

**溝2** (図13・14、写真図版11-6) A区東部の段切り区画上段の深掘り部の断面で検出した。幅0.6m以上、長さ1.5m以上、深さ約0.3mである。埋土は砂が多く混じり、流水の痕跡がある。

西端を畑耕作土に壊されており、造成層が上に乗ることから、それらより古い。遺物は出土しておらず、年代は不明である。

**畑耕作痕** (図13・14、写真図版12-1) A区北西部の段切り区画上段で検出した。畑の耕作にともなって土が攪乱されており、深さは最も深い所で0.3m程である。耕作土の上面W-17°-Eの方向に走る小溝を4条、N-15°-Sの方向に走る小溝を1条検出した。溝群は幅0.4～0.6m、深さ0.1m程で断面形は皿型であり、畑の耕作に伴うものと考えられる。断面を観察したところ、耕作土層は激しく乱れており、何度も耕されていることがわかる。

段切りに伴う造成層と溝2を壊しており、それらより新しい。耕作土層から17世紀の肥前産磁器皿片1点が出土している。

**風倒木痕1** (図13、写真図版12-2) A区の段切り下面南東部で検出した。長辺2m、短辺1mの概ね隅丸方形である。埋土の状況から風倒木痕の可能性が高い。

**風倒木痕2** (図13、写真図版12-3) B区で検出した。長径2.2m、短径1.8mの楕円形である。埋土の状況から風倒木痕の可能性が高い。

## (3) 出土遺物 (表4・5、写真図版12-4)

国産陶磁器1点、縄文土器4点、蹄鉄1点、砥石1点が出土している。畑耕作土層から出土した国産陶磁器以外は全て遺構外からである。

国産陶磁器(表4-3-1)は肥前産磁器皿で17世紀のものである。縄文土器はいずれも小片で全

体形が不明であり、詳細な年代の特定は難しい。蹄鉄と砥石については、年代が不明である。

## まとめ

今回の調査では、段切り造成による区画は近世以降のものであることがわかった。区画上段の北側では、近世以降長い間畑が耕作されていたようである。しかし、区画の内側で遺構は確認できなかった。

区画は内部の中央付近にある2基の塚を囲うためのものであった可能性が高いが、この塚の年代が区画と同じかどうか、が問題となる。今後、この点を解明するための調査が必要である。

(二階堂)





图13 平泉野遺跡(若井原194-115地点)調査区配置図



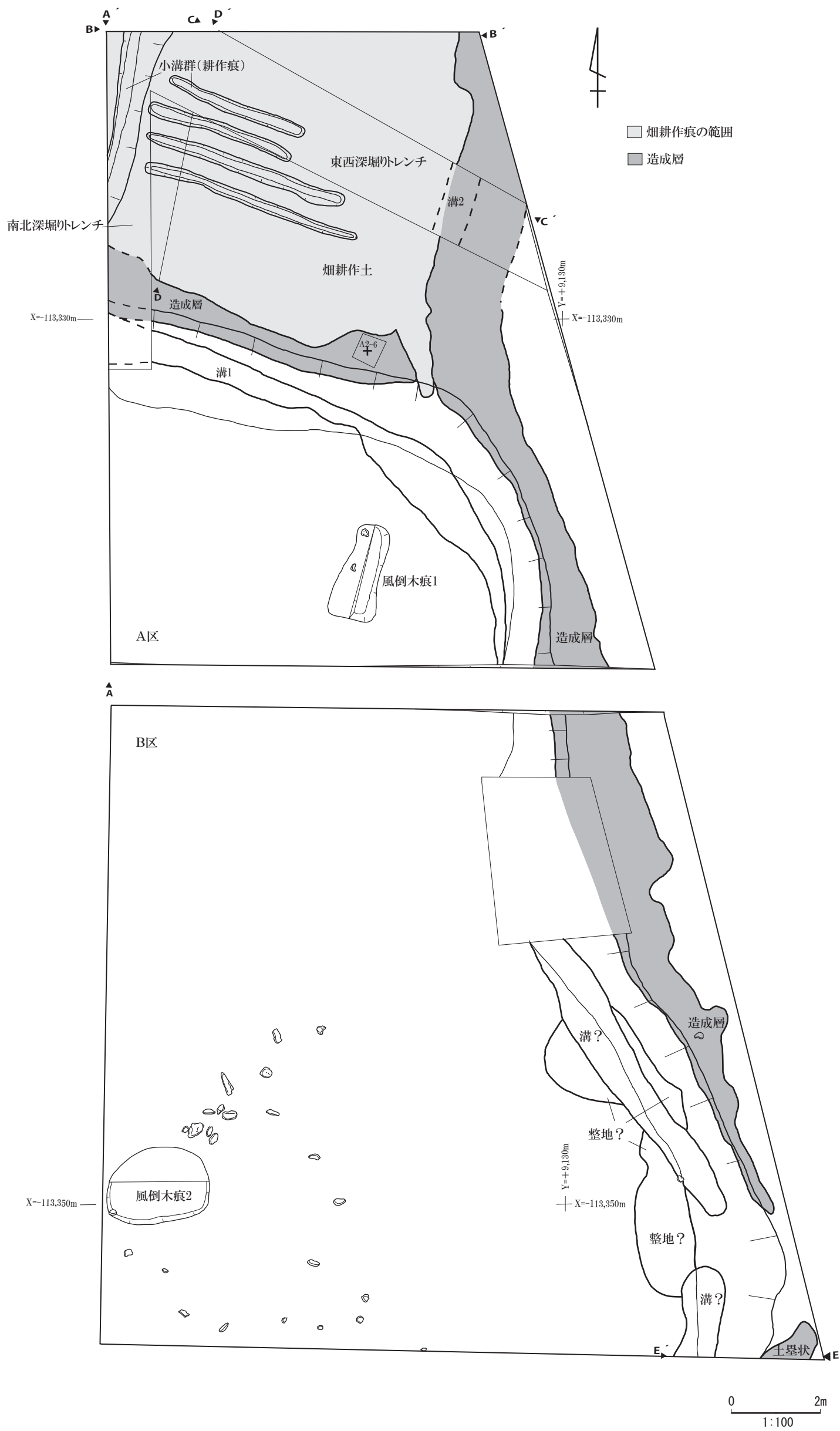
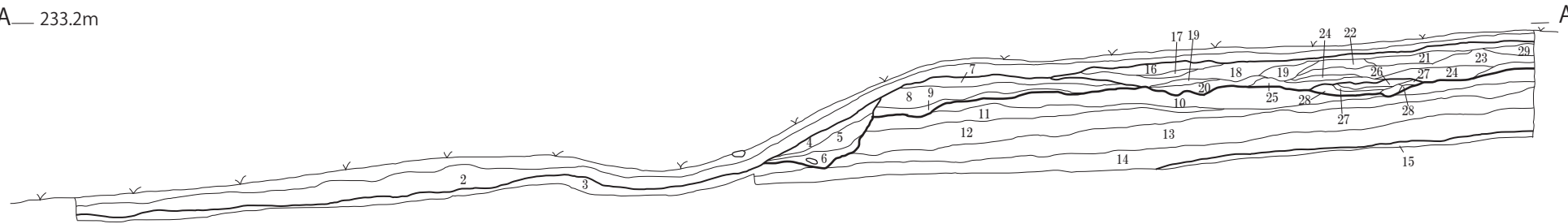
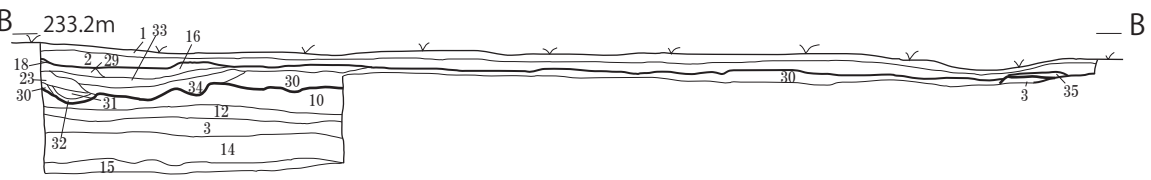


図14 平泉野遺跡(若井原194-115地点)遺構配置図

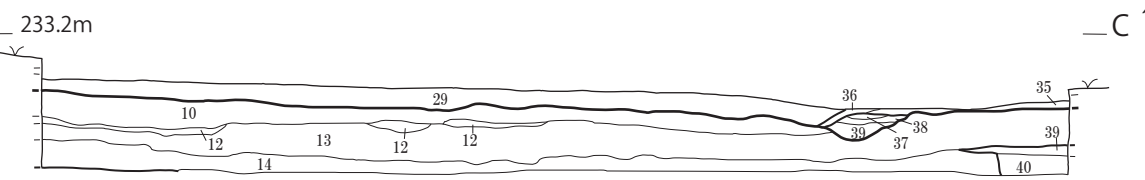
A 233.2m



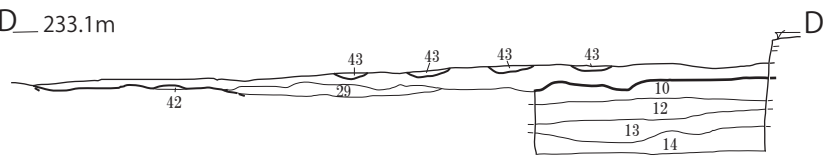
B 233.2m



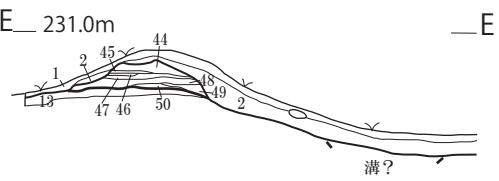
C 233.2m



D 233.1m



E 231.0m



土層注記ABCDE

- 1 10YR3/4暗褐色粘土質シルト。炭化物粒を少量含む。粘性ややあり。しま弱。腐葉土を多量含む。現表土。基本土層Ⅰ層。
- 2 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。地山粒・炭化物粒を微量、焼土粒を極微量含む。粘性中。しま強。基本土層Ⅱ層。
- 3 10YR2/1黒色粘土質シルト。炭化物を粒極微量含む。粘性強。しま強。基本土層Ⅳ層。
- 4 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。地山粒微量、炭化物粒・焼土粒を極微量含む。粘性強。しまやや強。段切造成に伴う溝埋土上層。
- 5 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。地山粒・極小塊やや多く、炭化物粒・焼土粒を極微量含む。粘性強。しま強。整地層崩壊流出層。段切造成に伴う溝の埋土中層。
- 6 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒を微量含む。粘性強。しま極めて強。段切造成に伴う溝埋土下層。
- 7 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。地山粒・極小塊を多量、炭化物粒・焼土粒を微量含む。粘性強。しま極めて強。段切造成に伴う整地層上層。
- 8 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒・極小塊を中量、炭化物粒を極微量、焼土粒を微量含む。粘性強。しま極めて強。段切造成に伴う整地層中層。
- 9 10YR3/2黒褐色粘土質シルト。地山粒・極小塊を多量、炭化物粒・焼土粒を微量含む。粘性強。しま極めて強。段切造成に伴う整地層下層。
- 10 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒・炭化物粒・焼土粒を微量含む。粘性強。しま強。基本土層Ⅲa層。
- 11 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒少量、炭化物粒・焼土粒を微量含む。粘性強。しま極めて強。基本土層Ⅲb層。
- 12 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒・炭化物粒・焼土粒を極微量含む。粘性強。しま極めて強。基本土層Ⅲc層。
- 13 10YR2/1黒色粘土質シルト。炭化物粒を極微量含む。粘性強。しま強。基本土層Ⅳ層。
- 14 10YR2/1黒色粘土質シルト。地山粒を極微量含む。粘性極めて強。しま極めて強。縄文土器を包含する。基本土層Ⅴ層。
- 15 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山小・中塊をやや多く含む。粘性極めて強。しま極めて強。地山漸移層。基本土層Ⅵ層。
- 16 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。地山粒・極小・小塊を極多量含む。粘性強。しま極めて強。畑(新时期)耕作痕上層。
- 17 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト。粘性強。しま極めて強。地山粒・小ブロック少量含む。畑(新时期)耕作痕下層。
- 18 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。粘性強。しま極めて強。地山粒・極小ブロック少量、炭化物粒・焼土粒極微量含む。畑(新时期)耕作土。
- 19 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。粘性強。しま極めて強。地山粒・小ブロック少量、炭化物粒・焼土粒極微量含む。畑(新时期)耕作土。
- 20 10YR3/4暗褐色粘土質シルト。粘性強。しま極めて強。地山粒・小ブロック多量、炭化物粒・焼土粒微量含む。畑(新时期)耕作土。
- 21 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。地山粒・炭化物粒・焼土粒を微量含む。粘性強。しま極めて強。畑(新时期)耕作土。
- 22 10YR4/3こぶい黄褐色粘土質シルト。地山粒・極小塊を多量、炭化物粒・焼土粒を極微量含む。粘性強。しま極めて強。畑(新时期)耕作土。
- 23 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。地山粒・極小塊を少量、炭化物粒・焼土粒を微量含む。粘性やや強。しま極めて強。畑(新时期)耕作土。
- 24 10YR4/3こぶい黄褐色粘土質シルト。地山粒・極小・小塊を多量含む。粘性強。しま極めて強。畑(新时期)耕作土。
- 25 10YR3/4暗褐色粘土質シルト。地山粒・極小塊を多量、炭化物粒・焼土粒極微量含む。粘性やや強。しま極めて強。畑(旧期)耕作土。
- 26 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒を微量、炭化物粒・焼土粒を極微量含む。粘性強。しま極めて強。
- 27 10YR3/2黒褐色粘土質シルト。地山粒・極小塊を少量含む。粘性強。しま極めて強。
- 28 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒を微量含む。粘性強。しまやや強。
- 29 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。地山粒・極小塊を少量、炭化物粒・焼土粒を極微量含む。粘性強。しま極めて強。18層より黒味を帯びる。畑(新时期)耕作土。
- 30 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒を微量含む。粘性強。しま極めて強。畑(旧期)耕作土。
- 31 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒・炭化物粒・焼土粒を極微量含む。粘性強。しま極めて強。畑(旧期)耕作痕。
- 32 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒を少量含む。粘性強。しま極めて強。畑(旧期)耕作痕。
- 33 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒を少量、炭化物粒・焼土粒を微量含む。粘性強。しま極めて強。畑(新时期)耕作土。
- 34 10YR3/4暗褐色粘土質シルト。地山粒・極小塊をやや多く、炭化物粒・焼土粒を極微量含む。粘性強。しま極めて強。畑(新时期)耕作土。
- 35 10YR3/1黒褐色粘土質シルト。地山粒・極小塊を少量、炭化物粒・焼土粒を極微量含む。粘性やや強。しま極めて強。整地層下層。

- 36 10YR3/2黒褐色粘土質シルト。地山粒・極小塊を中量含む。粘性ややあり。しま強。整地層上層。
- 37 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒を少量含む。粘性強。しま強。溝2の埋土上層。
- 38 10YR2/1黒色粘土質シルト。地山粒を微量、炭化物粒・焼土粒を極微量含む。粘性強。しま強。溝2の埋土中層。
- 39 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒・極小塊を多量含む。粘性強。しま強。砂質分を多く含む。溝2の埋土下層。
- 40 10YR2/1黒色粘土質シルト。粘性強。しま中。明瞭な混入物なし。41層の上部に堆積。
- 41 10YR2/1黒色粘土質シルト。地山粒極小～大塊を極多量含む。粘性極めて強。しま極めて強。縄文時代の遺構埋土?。地山漸移層(基本土層Ⅵ層)の可能性もあり。
- 42 10YR3/2黒褐色粘土質シルト。10YR4/4褐色粘土質シルト極小～大塊を中量、地山粒極小～中塊を少量、炭化物粒・焼土粒を極微量含む。粘性中。しま中。畑(新时期)耕作痕。
- 43 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。地山粒を中量含む。粘性やや強。しま中。土層Ⅶ①層。
- 44 10YR4/4褐色粘土質シルト。地山粒を極微量含む。粘性強。しま強。土層Ⅶ②層。
- 45 10YR4/4褐色粘土質シルト。地山粒を極多量含む。粘性強。しま極めて強。土層Ⅶ③層。
- 46 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒を少量、炭化物粒・焼土粒を極微量含む。粘性極めて強。しま極めて強。土層Ⅶ④層。
- 47 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。地山粒を中量含む。粘性強。しま極めて強。土層Ⅶ⑤層。
- 48 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。粘性極めて強。しま中。明瞭な混入物なし。土層Ⅶ⑥層。
- 49 10YR3/2黒褐色粘土質シルト。地山粒を極微量含む。粘性極めて強。しま極めて強。土層Ⅶ⑦層。

図15 平泉野遺跡(若井原194-115地点)土層断面図

## 6. 骨寺村莊園遺跡の踏査（白山社及び駒形根神社周辺）

平成26年度に続き、白山社及び駒形根神社周辺の踏査を行った。期間は27年4月8日～15日である。踏査範囲は、「平泉野台地」と呼ばれる丘陵の概ね南側半分の約397,000㎡である。

平場や塚状の高まり等人工的な造成の可能性があるもの、古墓や石碑等を抽出したが（図16）、全て現状での観察によるものであり、年代等は未詳である。

### 1. 主な成果（図16、写真1・2）

踏査範囲のほとんどが山林である。東端に駒形根神社が鎮座し、平泉野台地を横断する林道が東西に走る。地元の古老によると、この道は林道として整備された平成初期以前（少なくとも昭和初期）から使われており、西進すれば山王窟に至るとのことである。しかし、現在は林道が切れる部分以西は藪に阻まれ、通行は困難である。

丘陵の南東隅の裾部にある駒形根神社の別当家「テラサキ」の敷地内に、元禄2年（1689）の近世墓を確認した（写真1）。

丘陵の中央部中腹に昭和初期に「学校林」として使われていた東西40m、南北90m程の平場がある。東端に若干の土塁状の高まりが認められ、中心からやや北側に礎石状の石材（写真2）を確認した。

丘陵の南西隅の裾部の緩斜面に礎石状石材が点在する場所があり、その南に隣接して塚状の高まり2基と近世墓の可能性のある石群を確認した。塚は直径3m程の円形と、長径3m、短径2m程の楕円形で、どちらも高さ0.3m程で表面には石が集中している。近隣の古老によると、この地点の直西の水田は「ヤシキダ」と呼ばれていたということから、屋敷跡の可能性はある。

### 2. まとめ

26年度踏査部分と合わせて、平泉野台地の踏査が終了した。その中で、連なる2つの頂部である「オイノモリ」「ドウジヤマ」の南側に、遺構らしき地形が集中していることが注目される。塚群とそれを囲む段切りの区画（塚群2）、学校林の平場と礎石状石材等である。塚群に関しては、國學院大学が既に踏査で発見しており、直東で道が交差することから、辻の祭祀と関連した塚である可能性を指摘している（國學院大学1997）。

今後は、このような地点を抽出して、地形測量や発掘調査などを実施していく必要がある。

（二階堂）



写真1 「テラサキ」の近世墓



写真2 「学校林」の礎石状石材



## 7. 平泉野遺跡（若井原194－115地点）に係る火山灰分析

### はじめに

平泉野遺跡（若井原194－115地点）から採取した火山灰と推定された試料を対象に、テフラ（火山灰等の火山砕屑物）の検出を行う。テフラであれば火山ガラスまたは重鉱物の屈折率の測定を行い、既知の火山灰と対比し、平泉野遺跡における年代資料とする。

### 1. 試料

試料は、造成層直下の黒色土層であるⅢ a 層とⅢ b 層の間に、赤味を帯びたブロック状の土壌として確認している。Ⅲ a 層、Ⅲ b 層およびそれらの上位にある造成層から出土した炭化物に対して放射性炭素年代測定を行い、いずれの層も近世から近代頃までに属すると推定される（8章参照）。

### 2. 分析方法

試料約20 gを蒸発皿に取る。水を加え、泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことで得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下で観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

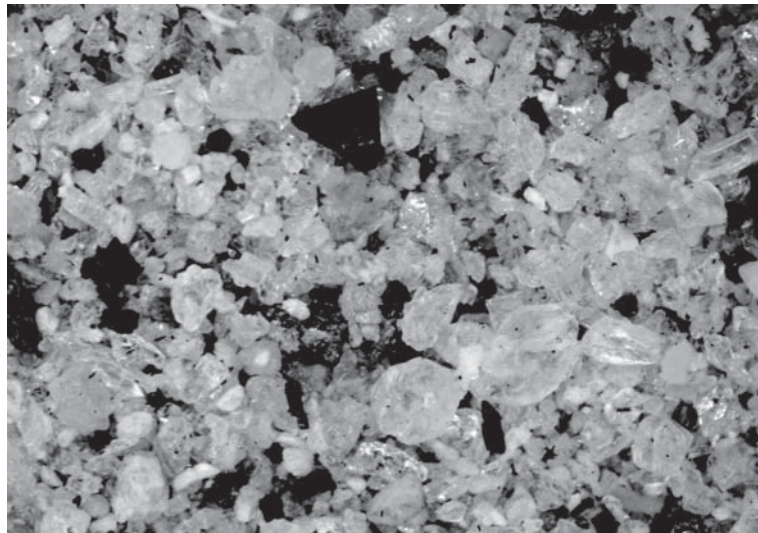
火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラス、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

### 3. 結果

砂分は、細砂～粗砂径の無色透明または半透明または白色の石英および長石類の鉱物片を主体とし、他に黒色または緑色を呈する輝石類の鉱物片が極めて微量混在する。テフラの本質物質については、無色透明の軽石型火山ガラスと褐色を帯びたバブル型火山ガラスがともに極めて微量混在するだけである。このような砂分の状況から、採取された土壌はテフラではないと判断される。したがって、ここでは特に屈折率の測定は行わない。極めて微量検出された火山ガラスは、黒ボク土中に含まれていた砕屑物に由来すると考えられる。

平泉野遺跡の地理的条件を考慮すれば、黒ボク土中に含まれている火山ガラスは、主に完新世に噴出した十和田カルデラを給源とするテフラに由来すると考えられるが、今回のような火山ガラスの産状では、由来するテフラの特定までは難しい。

図版1 砂分の状況



1.0mm

1. 砂分の状況  
平泉野遺跡(若井原194-115地点)火山灰試料

## 8. 平泉野遺跡（若井原194-115地点）に係る放射性炭素年代測定（AMS法）

### 1. 測定対象試料

測定対象試料は、岩手県一関市巖美町に所在する平泉野遺跡（若井原194-115地点）の段切遺構に伴う造成層と、その直下の黒色土層から出土した炭化物18点である（表2）。

### 2. 測定の意義

造成層およびその直下層（黒色土層）の年代を明らかにする。

### 3. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸- アルカリ- 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理には、通常1 mol/l（1 M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理には水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表2に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトをハンドプレス機で内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込んで、測定装置に装着する。

### 4. 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）、<sup>14</sup>C濃度（<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C）の測定を行う。米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に行う。

### 5. 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表2）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) 14C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表2に、補正していない値を参考値として表3に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、14C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。pMCが小さい（<sup>14</sup>Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（<sup>14</sup>Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表2

に、補正していない値を参考値として表3に示した。

- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差(1σ=68.2%)あるいは2標準偏差(2σ=95.4%)で表示される。グラフの縦軸が<sup>14</sup>C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ<sup>13</sup>C補正を行い、下1桁を丸めない<sup>14</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCal v4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表3に示した。暦年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

#### 4. 測定結果

測定結果を表2・3に示す。

試料18点の<sup>14</sup>C年代は、4340±30yrBP (No. 4) から100±30yrBP (No. 17) という広い幅を持つ。暦年較正年代(1σ)で見ると、最も古いNo. 4が縄文時代中期中葉頃、2番目に古いNo. 3が縄文時代晩期後葉から弥生時代前期頃、3、4番目に古いNo. 8、21が弥生時代後期頃、これらに次いで古墳時代、古代、中世に相当する年代を示すものがあり、最も新しい試料群No. 1、5、10~13、16、17は近世から近代頃の値を示している(小林2009、小林編2008、佐原2005)。なお、No. 1、5、10~13、16、17の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する(表3下の警告参照)。

層の上下関係に対応した年代値の変化は明確に認められず、新しい年代を示した試料に基づくと、いずれの層も近世から近代に属すると理解される。また、縄文時代、弥生時代に相当する年代を示した特に古い試料が整地層に限られ、直下層の試料が古墳時代以降であることは、この場所の堆積過程と整地に用いられた土の由来を反映していると考えられる。

なお、試料No. 8、21が含まれる1~3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある(尾寄2009、坂本2010など)。その日本版較正曲線を用いてこれらの試料の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率は全て60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。



表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-151584	No.1	34 層(段切遺構に伴う造成層)	炭化物	AaA	-13.55 ± 0.25	190 ± 20	97.71 ± 0.30
IAAA-151585	No.3	34 層(段切遺構に伴う造成層)	炭化物	AaA	-25.67 ± 0.34	2,430 ± 30	73.93 ± 0.24
IAAA-151586	No.4	34 層(段切遺構に伴う造成層)	炭化物	AaA	-26.52 ± 0.59	4,340 ± 30	58.26 ± 0.22
IAAA-151587	No.5	IIIa 層(造成直下黒色土層)	炭化物	AAA	-25.54 ± 0.44	110 ± 20	98.62 ± 0.29
IAAA-151588	No.6	IIIb 層(造成直下黒色土層)	炭化物	AAA	-22.78 ± 0.57	780 ± 30	90.77 ± 0.29
IAAA-151589	No.8	33 層(段切遺構に伴う造成層)	炭化物	AAA	-23.01 ± 0.55	1,950 ± 30	78.44 ± 0.25
IAAA-151590	No.9	33 層直上層(段切遺構に伴う造成層)	炭化物	AAA	-24.73 ± 0.66	890 ± 20	89.57 ± 0.28
IAAA-151591	No.10	33 層(段切遺構に伴う造成層)	炭化物	AAA	-23.90 ± 0.44	170 ± 30	97.90 ± 0.31
IAAA-151592	No.11	33 層(段切遺構に伴う造成層)	炭化物	AAA	-23.26 ± 0.54	190 ± 20	97.72 ± 0.29
IAAA-151593	No.12	33 層(段切遺構に伴う造成層)	炭化物	AAA	-23.59 ± 0.49	190 ± 30	97.68 ± 0.31
IAAA-151594	No.13	33 層(段切遺構に伴う造成層)	炭化物	AaA	-25.27 ± 0.66	120 ± 20	98.51 ± 0.31
IAAA-151595	No.14	IIIb 層(造成直下黒色土層)	炭化物	AaA	-24.36 ± 0.50	940 ± 20	88.96 ± 0.27
IAAA-151596	No.16	IIIb 層(造成直下黒色土層)	炭化物	AAA	-24.31 ± 0.55	160 ± 30	98.00 ± 0.31
IAAA-151597	No.17	IIIb 層(造成直下黒色土層)	炭化物	AAA	-24.60 ± 0.32	100 ± 30	98.71 ± 0.31
IAAA-151598	No.18	IIIb 層(造成直下黒色土層)	炭化物	AAA	-24.02 ± 0.62	880 ± 20	89.60 ± 0.28
IAAA-151599	No.19	IIIb 層(造成直下黒色土層)	炭化物	AAA	-23.61 ± 0.58	1,110 ± 20	87.14 ± 0.26
IAAA-151600	No.20	IIIb 層(造成直下黒色土層)	炭化物	AAA	-25.75 ± 0.53	1,290 ± 30	85.17 ± 0.27
IAAA-151601	No.21	33 層(段切遺構に伴う造成層)	炭化物	AaA	-23.74 ± 0.54	1,930 ± 20	78.60 ± 0.23

[#7611]

表3 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、暦年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代) (1)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-151584	Modern	100.02 ± 0.30	186 ± 24	1666calAD - 1682calAD (13.8%)* 1738calAD - 1756calAD (12.3%)* 1762calAD - 1784calAD (19.9%)* 1795calAD - 1803calAD ( 5.9%)* 1937calAD - ... (16.2%)*	1656calAD - 1689calAD (19.5%)* 1729calAD - 1810calAD (54.5%)* 1926calAD - ... (21.4%)*
IAAA-151585	2,440 ± 30	73.83 ± 0.23	2,426 ± 26	539calBC - 413calBC (68.2%)	747calBC - 686calBC (16.5%) 666calBC - 643calBC ( 4.8%) 555calBC - 404calBC (74.1%)
IAAA-151586	4,360 ± 30	58.08 ± 0.20	4,339 ± 29	3011calBC - 2978calBC (26.0%) 2960calBC - 2952calBC ( 4.7%) 2942calBC - 2904calBC (37.5%)	3023calBC - 2896calBC (95.4%)

<b>IAAA-151587</b>	120 ± 20	98.51 ± 0.27	111 ± 23	1693calAD - 1710calAD (10.6%)** 1718calAD - 1727calAD ( 5.9%)** 1813calAD - 1890calAD (46.8%)** 1910calAD - 1918calAD ( 4.9%)**	1682calAD - 1736calAD (27.6%)** 1805calAD - 1932calAD (67.8%)**
<b>IAAA-151588</b>	740 ± 20	91.18 ± 0.27	778 ± 25	1225calAD - 1233calAD (14.0%) 1243calAD - 1270calAD (54.2%)	1219calAD - 1276calAD (95.4%)
<b>IAAA-151589</b>	1,920 ± 20	78.76 ± 0.24	1,950 ± 25	24calAD - 76calAD (68.2%)	21calBC - 12calBC ( 1.5%) 2calBC - 125calAD (93.9%)
<b>IAAA-151590</b>	880 ± 20	89.62 ± 0.25	885 ± 24	1055calAD - 1077calAD (17.5%) 1153calAD - 1206calAD (50.7%)	1045calAD - 1095calAD (28.2%) 1119calAD - 1218calAD (67.2%)
<b>IAAA-151591</b>	150 ± 20	98.12 ± 0.30	170 ± 25	1669calAD - 1682calAD (11.2%)* 1735calAD - 1781calAD (39.3%)* 1799calAD - 1806calAD ( 5.8%)* 1930calAD - 1945calAD (11.9%)*	1662calAD - 1696calAD (17.3%)* 1726calAD - 1815calAD (54.0%)* 1837calAD - 1844calAD ( 1.0%)* 1851calAD - 1877calAD ( 2.8%)* 1917calAD - ... (20.3%)*
<b>IAAA-151592</b>	160 ± 20	98.07 ± 0.27	185 ± 24	1666calAD - 1682calAD (13.7%)* 1738calAD - 1756calAD (13.1%)* 1762calAD - 1784calAD (19.7%)* 1796calAD - 1803calAD ( 5.6%)* 1937calAD - ... (16.1%)*	1656calAD - 1690calAD (19.4%)* 1728calAD - 1810calAD (54.7%)* 1925calAD - ... (21.3%)*
<b>IAAA-151593</b>	170 ± 20	97.96 ± 0.30	188 ± 25	1665calAD - 1681calAD (13.9%)* 1738calAD - 1755calAD (11.2%)* 1762calAD - 1785calAD (19.8%)* 1793calAD - 1803calAD ( 6.9%)* 1937calAD - ... (16.3%)*	1655calAD - 1688calAD (20.0%)* 1730calAD - 1810calAD (54.1%)* 1926calAD - ... (21.3%)*

表3 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、暦年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代) (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
<b>IAAA-151594</b>	120 ± 20	98.46 ± 0.27	120 ± 24	1687calAD - 1707calAD (11.6%)* 1719calAD - 1730calAD ( 6.5%)* 1809calAD - 1826calAD ( 9.3%)* 1833calAD - 1885calAD (33.0%)* 1913calAD - 1927calAD ( 7.9%)*	1681calAD - 1739calAD (27.6%)* 1745calAD - 1763calAD ( 3.2%)* 1802calAD - 1896calAD (50.2%)* 1902calAD - 1938calAD (14.5%)*
<b>IAAA-151595</b>	930 ± 20	89.07 ± 0.25	940 ± 23	1036calAD - 1051calAD (12.5%) 1082calAD - 1128calAD (40.7%) 1134calAD - 1151calAD (15.0%)	1030calAD - 1155calAD (95.4%)
<b>IAAA-151596</b>	150 ± 20	98.13 ± 0.29	162 ± 25	1669calAD - 1687calAD (11.8%)* 1731calAD - 1780calAD (37.1%)*	1665calAD - 1698calAD (16.5%)* 1723calAD - 1785calAD (40.3%)*

				1798calAD - 1809calAD ( 7.3%)* 1927calAD - 1944calAD (12.0%)*	1793calAD - 1816calAD (10.6%)* 1834calAD - 1879calAD ( 8.5%)* 1916calAD - ... (19.5%)*
<b>IAAA-151597</b>	100 ± 20	98.79 ± 0.30	104 ± 25	1695calAD - 1726calAD (22.0%)** 1814calAD - 1853calAD (23.4%)** 1868calAD - 1892calAD (16.3%)** 1908calAD - 1917calAD ( 6.6%)**	1682calAD - 1735calAD (27.4%)** 1806calAD - 1930calAD (68.0%)**
<b>IAAA-151598</b>	870 ± 20	89.78 ± 0.25	882 ± 24	1058calAD - 1075calAD (12.2%) 1154calAD - 1208calAD (56.0%)	1045calAD - 1095calAD (24.8%) 1120calAD - 1219calAD (70.6%)
<b>IAAA-151599</b>	1,080 ± 20	87.39 ± 0.24	1,105 ± 23	898calAD - 924calAD (30.6%) 945calAD - 978calAD (37.6%)	890calAD - 990calAD (95.4%)
<b>IAAA-151600</b>	1,300 ± 20	85.04 ± 0.25	1,289 ± 25	677calAD - 714calAD (41.9%) 744calAD - 765calAD (26.3%)	666calAD - 770calAD (95.4%)
<b>IAAA-151601</b>	1,910 ± 20	78.80 ± 0.22	1,934 ± 23	29calAD - 39calAD ( 9.7%) 50calAD - 86calAD (54.4%) 110calAD - 115calAD ( 4.1%)	21calAD - 126calAD (95.4%)

[参考値]

\* Warning! Date may extend out of range

Warning! Date probably out of range

\*\* Warning! Date probably out of range

(これらの警告は較正プログラム OxCal が発するもので、試料の <sup>14</sup>C 年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。\*、\*\*の順にその可能性が高くなる。)

## 文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

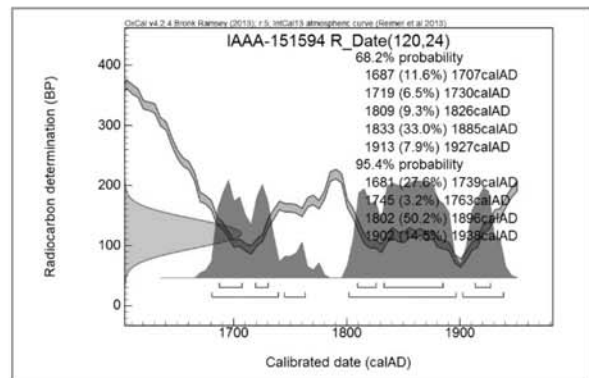
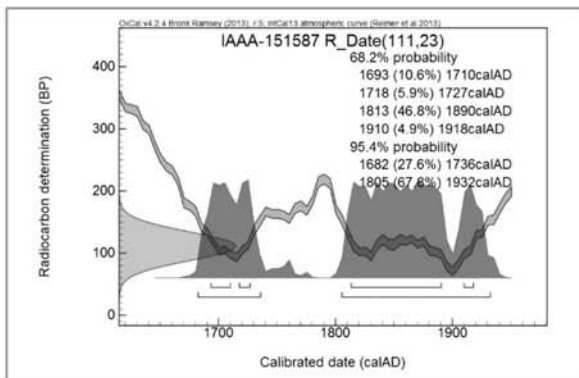
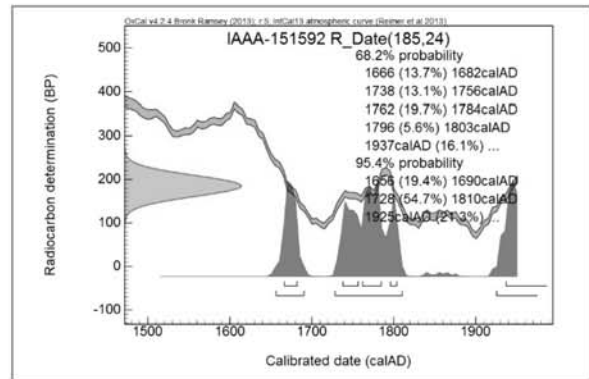
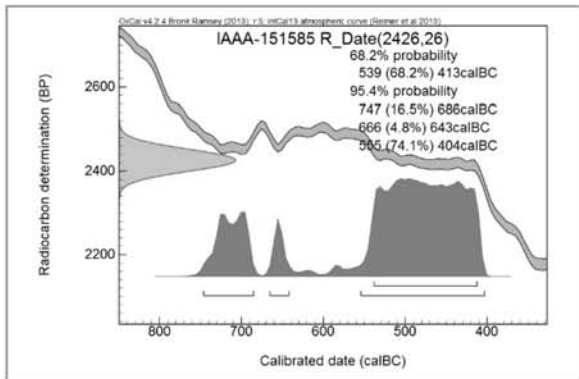
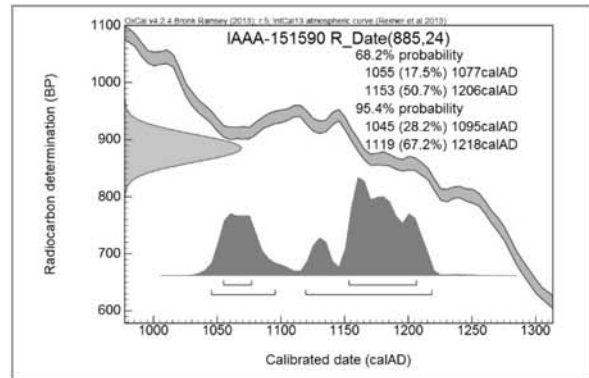
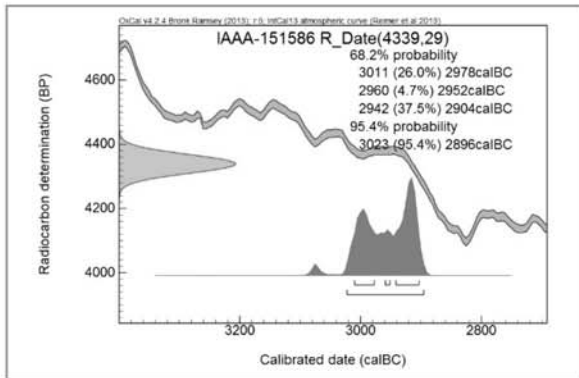
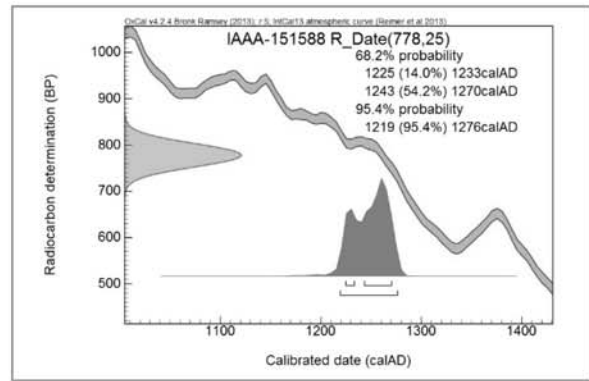
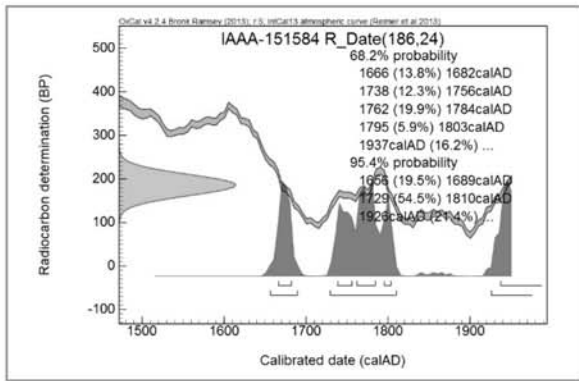
尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素 14 年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編弥生時代の考古学 1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235

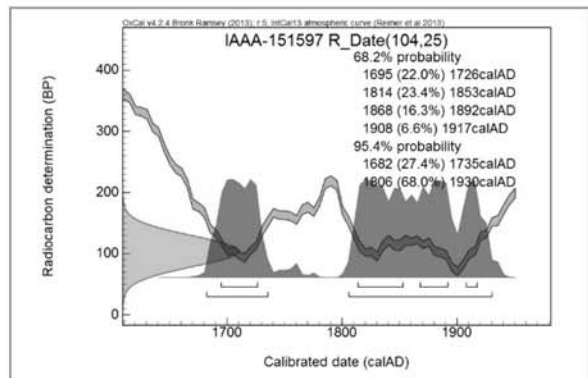
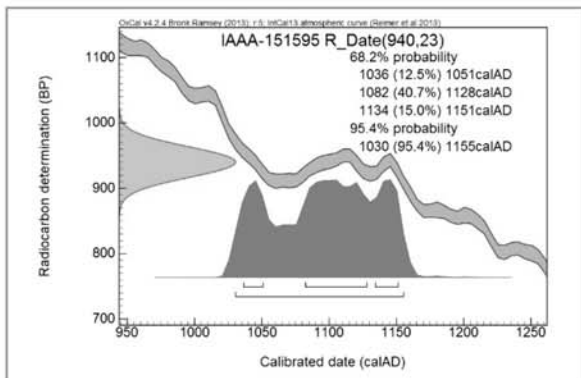
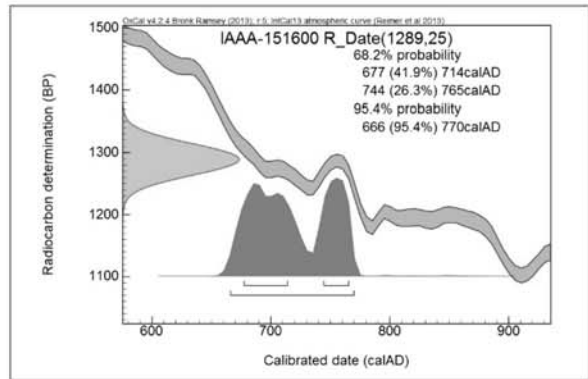
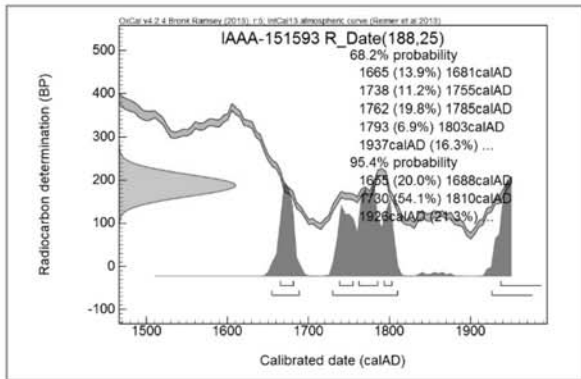
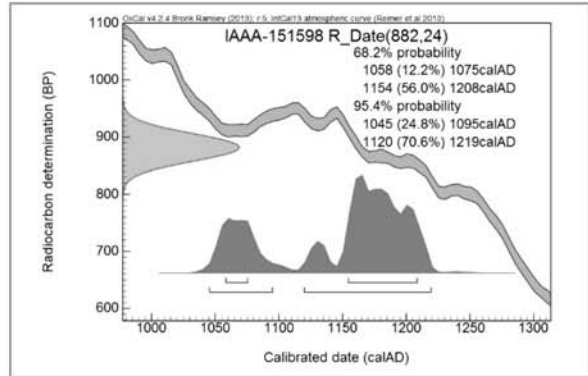
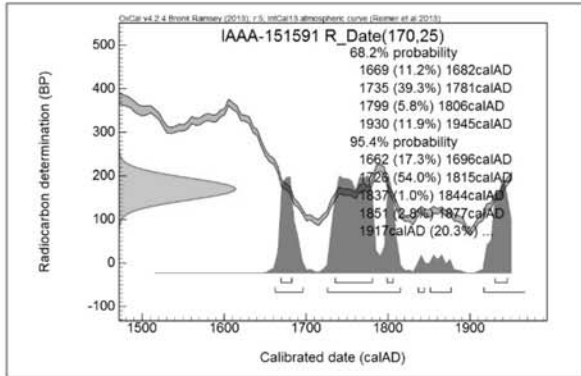
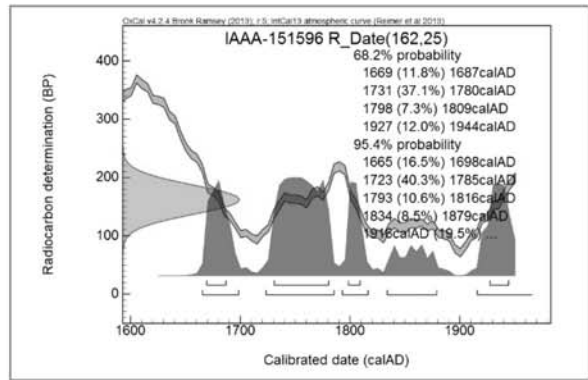
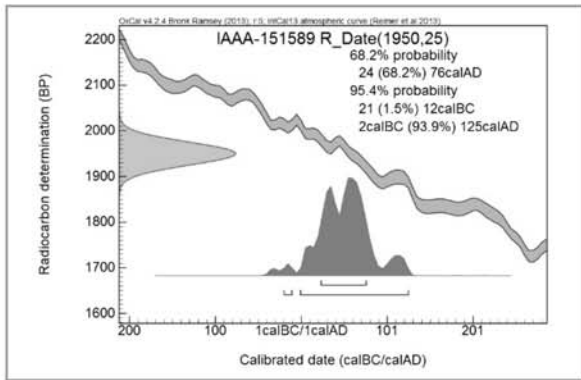
Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

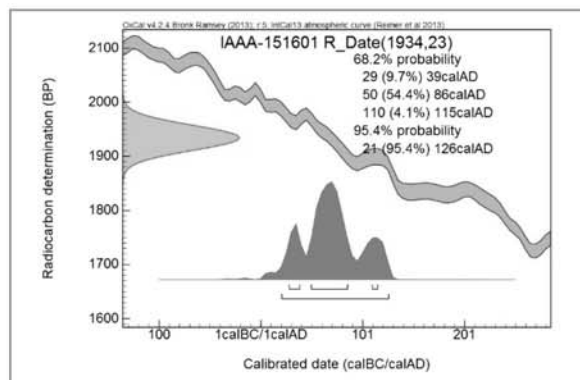
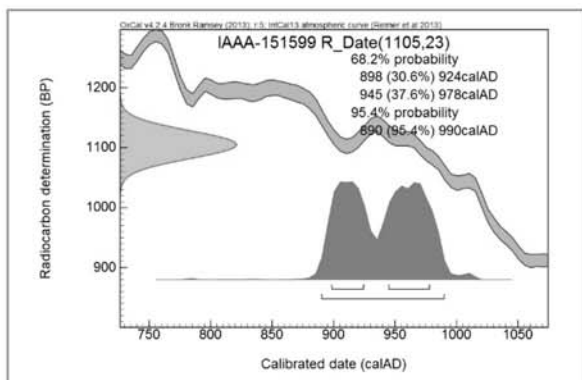
佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学 上 ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ-, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株) 加速器分析研究所, 85-90

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of <sup>14</sup>C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363







[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

## 9. 総括

### 1. 白山社及び駒形根神社（中川6地点）の調査

平成25・26年度調査で新旧2時期あるとしていた最大平場の造成層について、17世紀以降に行われた造成によるものだけであると結論付けた。

平場上の建物については、長軸3間、短軸1間の掘立柱建物が平場造成の後に建てられたことを確認した。しかし、その規模は平場に比べて小さく、軸方向も異なる。原位を保っていると思われる石材3があり、その下に造成層が入っていることから、平場造成後に礎石建物が存在した可能性が高い。しかし、痕跡が少なく、規模を確定することはできなかった。

隣接する中川4地点では、約30基の塚群を確認しており、26年度調査ではそれらのうち1基の構築年代を13世紀後半と推定している。しかし、中川6地点との関係を示す証拠を発見するには至っていない。

### 2. 梅木田遺跡の調査

本年度調査でも25・26年度調査と同様に、江戸時代後期（あるいは明治期まで存続する）と考えられる掘立柱建物と柱列からなる屋敷が営まれていたことが判明した。

排土・表土から江戸時代（17世紀中葉）から近代までの陶磁器が出土している。特に17世紀末から18世紀末までの肥前産、18・19世紀の大堀相馬産の碗・皿など日常雑器が多いことから、屋敷で使用されたものであったと考えられる。遺構からの出土はなく、屋敷の年代を断定できないが、17世紀後半から近代に存続していた蓋然性が高い。

継続調査の中で、未調査である東部平場にどのように遺構が展開し、土地が利用されているかを明らかにすることが課題である。

### 3. 平泉野遺跡（若井原194-115地点）の調査

段切り造成による区画は近世以降のものであることがわかった。これは、段切り造成の層とその直下の黒色土層から出土した炭化物18点の放射性炭素年代測定（AMS法）を実施した結果、判明したことである。すなわち、炭化物の年代は縄文時代中期中葉頃から近代まで、幅広い測定値を示したが、層の上下関係に対応した年代値の変化は明確に認められなかった。新しい年代を示した試料に基づけば、いずれの層も近世から近代までに属すると考えられるのである。

区画上段の北側では、近世以降長く畑が耕作されていたようである。しかし、区画の内側には遺構は確認できなかった。区画は内部の中央付近にある2基の塚を囲うためのものであった可能性が高いが、この塚の年代が区画と同じかが問題となる。また、26年度に調査した中川4地点の塚との比較も必要である。今後、これらの点を明らかにすることが課題である。

### まとめ

「白山社及び駒形根神社」（中川6地点）では、平場の造成年代を17世紀以降と結論付けた。しかし、造成目的や、礎石建物の存在、中川4地点の塚群との関係の解明については、課題として残った。

「梅木田遺跡」については、25年度調査で13世紀中頃から後半までに位置付けられる龍泉窯系青磁鎗蓮弁文碗の破片が出土しているが、それと対応する遺構の抽出はできていない。そのため、東端平場

の調査実施により、遺構の展開を確認する必要がある。

平泉野遺跡では、段切り造成による区画を調査して、近世以降のものであることを確認した。今後は塚2基の調査を実施することで、中川4地点の塚群との比較が可能になり、年代や塚の機能について検討を進めることができるであろう。

(菅原)

#### 【参考文献】

- 一関市教育委員会2014『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集 骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』。
- 一関市教育委員会2015『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集 骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』。
- 一関市立本寺中学校編1977『須川・本寺風土記』。
- 伊藤信1957「辺境在家の成立—中尊寺領陸奥国骨寺村について—」『歴史』第15号 東北史学会。
- 大石直正1984「中尊寺領骨寺村の成立」『東北文化研究所紀要』第15号。
- 黒田日出男1995「陸奥國中尊寺領骨寺村との対話—描かれた東国の村と境相論—」『描かれた荘園の世界』新人物往来社。
- 國學院大学1997「中世骨寺村絵図の歴史地理学的調査（第6次）」。
- 五味文彦・本郷和人2008『現代語訳 吾妻鏡4 奥州合戦』吉川弘文館。
- 島田直明2012「Ⅲ. 骨寺村荘園遺跡の植生・植物相—特に丘陵地の植生—」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班。
- 関根達人2009「北奥の12世紀—堂ヶ平経塚の検討—」『平泉文化研究年報』第9号 岩手県教育委員会。
- 土井宣夫2012「Ⅱ. 地形地質」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班。
- 平塚明・島田直明・吉木岳哉・吉川昌伸2012「Ⅳ. 一関巖美町本寺地区岩井川左岸の旧河道における花粉分析」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班。
- 吉田敏弘2008『絵図と景観が語る 骨寺村の歴史～中世の風景が残る村とその魅力～』本の森。



## 1. 白山社及び駒形根神社

No.	地点・遺構名	層位	種類	器種	部位	産地	年代(C)	備考
1	H25年度	排土中	陶器	碗	口	大堀相馬	18	
2	H25年度	表土	磁器	皿	口	肥前	17末～18末	
3	H25年度	表土	磁器	皿	口	肥前	17末～18末	
4	H25年度	排土中	陶器	甕	胴	肥前?	18	
5	H25年度	排土中	陶器	甕	胴	在地?	19?	14と接合
6	H25年度 E区	表土	磁器	皿	体	肥前	17末～18末	
7	H25年度 F区	表土	磁器	皿	体	肥前	17末～18末	
8	H25年度 調査区外(北中央)		磁器	皿	口	肥前	17末～18末	
9	H25年度 E区	表土	磁器	皿	口	肥前	17末～18末	
10	H25年度 E区	Ⅱ層	磁器	皿	口	肥前	17末～18末	
11	H25年度 F区	Ⅱ層	陶器	小碗	底	大堀相馬	18	
12	H25年度 B区	Ⅱ層	磁器	皿	底	肥前	17末～18末	
13	H25年度 F区	Ⅱ層	陶器	碗	口	大堀相馬	19前	
14	H25年度 B区南東端拡張区東端	Ⅱ層最下部	陶器	甕	底	在地?	19?	5と接合
15	H25年度 E区西端拡張区	表土	陶器	碗	胴	肥前?	18	23と接合
16	H25年度 B区北東端拡張区	表土	陶器	碗	口	大堀相馬	18	
17	H25年度 B区北東端拡張区	Ⅱ層	陶器	碗	口	大堀相馬	18	
18	H25年度 B区北東端拡張区	Ⅱ層	陶器	碗	口	肥前?	18前?	呉器手 24と接合
19	H25年度 B区北東端拡張区	造成層	陶器	掃鉢	体	在地?	18?	写図3-3-3
20	H25年度 B区北端壁下サブトレンチ	造成層	磁器	皿	口～底	肥前	17前	口縁部輪花 口に鉄釉 21と接合
21	H25年度 B・D区北端壁下サブトレンチ	造成層	磁器	碗	口	肥前	17前	図3-2、写図3-3-2
22	H25年度 B・D区北端壁下サブトレンチ	造成層	磁器	皿	口	肥前	17末～18末	
23	H25年度 E区西端拡張区		陶器	甕	胴	肥前?	18	15と接合
24	H25年度 B区北東端拡張区	Ⅱ層	陶器	碗	口	肥前?	18前?	呉器手 18と接合
25	H25年度 B区1号石材北脇サブトレンチ	造成層最下部	磁器	皿	底	肥前	17前	図3-1、写図3-3-1
26	H25年度	排土中	磁器	皿	体	肥前	17末～18末	
27	H26年度 調査区外	表採	磁器	碗	高台	肥前	17末～18末	
28	H26年度	排土	磁器	皿	底	肥前	17末～18末	
29	H26年度 調査区外北西部	表採	陶器	壺	口～肩	在地	19以降	

## 2. 梅木田遺跡

No.	地点・遺構名	層位	種類	器種	部位	産地	年代(C)	備考
1	H27年度	排土	陶器	碗	口	大堀相馬	19	
2	H27年度	排土	陶器	碗	体～底	大堀相馬	18	鉄釉 写図8-8-1
3	H27年度	排土	磁器	碗	口	肥前	18末～19前	
4	H27年度	排土	磁器	碗	体	肥前	18後～19初	
5	H27年度	排土	磁器	皿	体～底	肥前	17中	写図8-8-2
6	H27年度	排土	陶器	皿	口	大堀相馬	19	
7	H27年度	排土	陶器	皿	体	大堀相馬	19	
8	H27年度	排土	磁器	小坏	口	肥前?	19?	
9	H27年度	排土	磁器	碗	口	肥前	18末～19前	
10	H27年度	排土	磁器	皿	口	肥前	17末～18末	
11	A区	表土	磁器	皿	口	—	近代	写図8-7-1
12	A区	攪乱	陶器	碗	口	肥前	18	写図8-7-2
13	A区	Ⅲ層(旧畑耕作土)	磁器	碗	体～底	肥前	18後～19初	写図8-7-3
14	B区	表土	陶器	碗	口	大堀相馬	19	写図8-8-3
15	B区	表土	陶器	碗	体	大堀相馬	19	
16	B区	表土	陶器	小坏	口	肥前	17末～18末	写図8-8-5
17	B区	表土	陶器	碗	体	肥前	17後～18前	写図8-8-6
18	B区	表土	磁器	碗	体	肥前	17末～18末	写図8-8-4
19	B区	表土	磁器	皿	口	肥前	17末～18末	
20	B区	表土	磁器	碗	底	肥前	17末～18末	写図8-8-7
21	B区	表土	磁器	皿	口	—	近代	輪花
22	B区	表土	磁器	急須蓋	天井	—	近代	宝珠形つまみ
23	B区	表土	陶器	碗	口	大堀相馬	19	写図8-8-8
24	B区	表土	陶器	皿	底	大堀相馬	19	写図8-8-9
25	B区	表土	磁器	皿	底	—	近代	
26	B区	表土	磁器	碗	口	肥前	17末～18末	
27	B区	表土	陶器	小碗	口～底	瀬戸美濃	18	写図8-8-10
28	B区	表土	磁器	碗	口	肥前	17末～18末	写図8-8-11
29	B区	表土	磁器	瓶	体	肥前	17末～18末	
30	B区	表土	磁器	碗	体	肥前	17末～18末	
31	B区	表土	磁器	碗	口	肥前	17末～18末	写図8-8-12

## 3. 平泉野遺跡

No.	地点・遺構名	層位	種類	器種	部位	産地	年代(C)	備考
1	北東区 区画土	畑耕作土層	磁器	皿	体	肥前	17	写図12-5-1

表4 陶磁器遺物観察表

※「写図」…写真図版

## 1. 白山社及び駒形根神社

No.	地点・遺構名	層位	種類	器種	部位	年代(C)	備考
1	H25年度 C区北端拡張区		縄文土器	不明	不明	縄文前期	0段多条、胎土に繊維を多く含む
2	H25年度 C区北端拡張区	地山直上層	炭	—	—	—	
3	H25年度 J区	地山直上層	縄文土器	不明	不明	縄文前期?	.
4	H26年度 池状遺構区P13	底面	木片	柱材	底	不明	
5	H26年度 B区南東拡張区	地山直上	石器	剥片	—	縄文	
6	H26年度 B区南東拡張区	地山直上	石器	サイドスクレイパー	—	縄文	

## 2. 梅木田遺跡

No.	地点・遺構名	層位	種類	器種	部位	年代(C)	備考
1	A区	表土	石器	剥片	—	縄文	写図8-7-4
2	A区	表土	石器	石匙	—	縄文	縦型、つまみ部欠損 写図8-7-5
3	A区	風倒木痕	石器	剥片	—	縄文	写図8-7-6
4	B区	表土	土器	焙烙	不明	近代	
5	B区	表土	石製品	不明	—	不明	粘板岩
6	B区	表土	金属製品	煙管	—	近世?	羅字および吸口残存 写図8-8-13
7	B区	表土	石器	石鏃	—	縄文	基部欠損
8	B区	表土	石製品	硯	—	不明	粘板岩 写図8-8-14
9	B区	8層(沢埋土上層)	石器	剥片	—	縄文	写図8-8-15
10	B区	8層(沢埋土上層)	石器	剥片	—	縄文	写図8-8-16
11	B区	9層(沢埋土下層)	石器	石鏃	—	縄文	完形 写図8-8-17

## 3. 平泉野遺跡

No.	地点・遺構名	層位	種類	器種	部位	年代(C)	備考
1	北東区	表土層	鉄製品	蹄鉄	—	不明	写図12-5-6
2	北東区	表土層	石製品	砥石	—	不明	写図12-5-7
3	北東区 西壁下サブトレンチ	V層	土器		胴	縄文	写図12-5-2
4	北東区 西壁下サブトレンチ	V層	土器		口	縄文	写図12-5-3
5	北東区 西壁下サブトレンチ	V層	土器		胴	縄文	写図12-5-4
6	北東区 西壁下サブトレンチ	V層	土器		胴	縄文	写図12-5-5

表5 その他出土遺物観察表

※「写図」…写真図版



1. 全景（南から）



2. 平場全景（北から）  
白山社及び駒形根神社(1)

写真図版2



1. B区造成層確認トレンチ（北から）



2. B区造成層断面（南から）



3. 石材3北脇造成層確認トレンチ（西から）



4. E区西端拡張区完掘（北から）



5. E区西端拡張区石列断ち割り



6. A区沢埋没層断面



7. P5土層断面



8. 風倒木痕完掘（南東から）

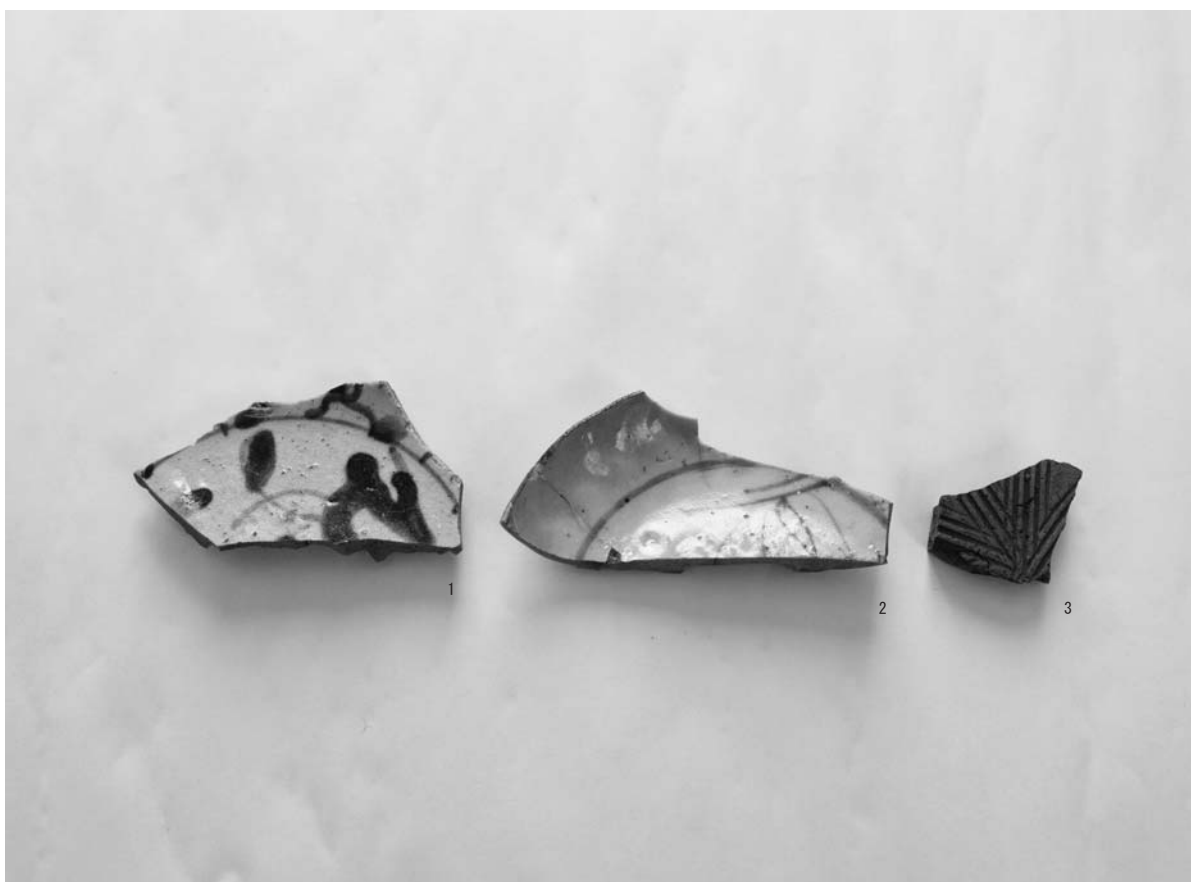
白山社及び駒形根神社(2)



1. L区完掘（西から）



2. L区東壁



3. 造成層出土遺物



1. 調査区完掘全景



2. 調査区完掘全景（遠景）



3. A区調査前状況



4. A区北壁土層断面



5. A区2層上面確認状況

梅木田遺跡(1)



1. A区自然木痕確認状況



2. A区（3層上面）完掘状況



3. B区調査前状況



4. B区南壁土層断面



5. B区完掘状況  
梅木田遺跡(2)



1. B区遺構群完掘状況



2. 掘立柱建物6 P417土層断面



3. 掘立柱建物6 P418土層断面



4. 掘立柱建物6 P419土層断面



5. 掘立柱建物6 P420土層断面

梅木田遺跡(3)





1. 掘立柱建物 6 P401土層断面



2. 掘立柱建物 6 P410土層断面



3. 掘立柱建物 6 P421土層断面



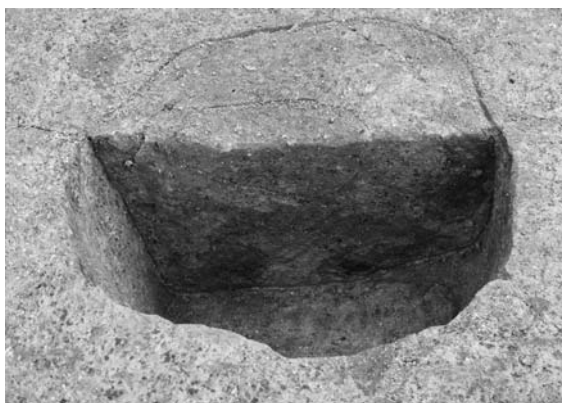
4. 掘立柱建物 6 P422土層断面



5. 掘立柱建物 6 P423土層断面



6. 柱列 9 完掘状況



7. 柱列 9 P424土層断面



8. 柱列 9 P425土層断面

梅木田遺跡(4)

写真図版8



1. 柱列9 P426土層断面



2. 柱列9 P427土層断面



3. 小溝群（畑耕作痕）確認状況



4. 小溝群（畑耕作痕）土層断面



5. 小溝群（畑耕作痕）土層断面（アップ）



6. 沢土層断面



7. 出土遺物（1）



8. 出土遺物（2）

梅木田遺跡(5)



1. 調査前全景（南から）



2. 塚1・2現況（南から）

平泉野遺跡(1)



1. 全景（南東から）



2. 全景（北東から）

平泉野遺跡(2)



1. 北東区区画造成層検出（南西から）



2. 北東区深掘トレンチ（東から）



3. 北東区西壁土層断面



4. 北東区西壁南端土層断面



5. 北東区北壁西端土層断面



6. 北東区東西深掘トレンチ北壁土層断面



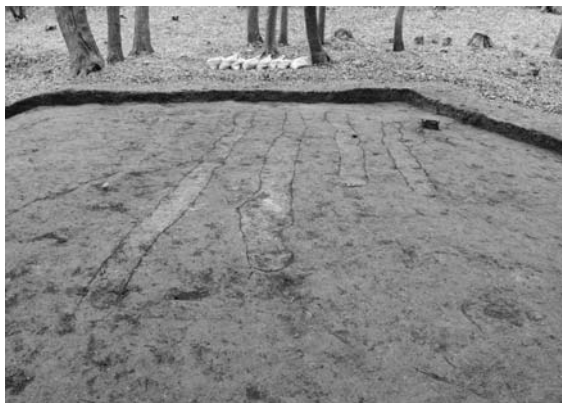
7. 南東区土塁状遺構土層断面



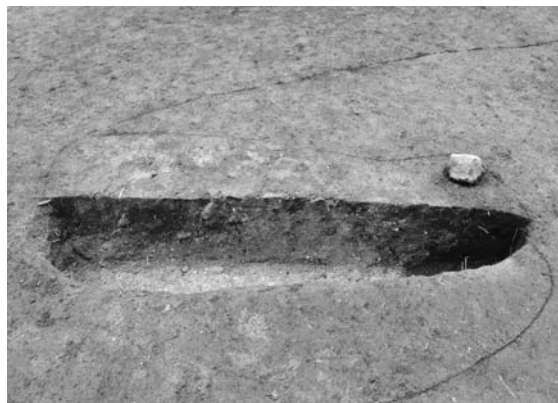
8. 北東区段切区画上段検出（南から）

平泉野遺跡(3)

写真図版12



1. 北東区小溝群（畑耕作痕）検出（東から）



2. 風倒木痕1土層断面（南から）



3. 風倒木痕2土層断面（南から）



4. 調査風景



5. 出土遺物  
平泉野遺跡(4)

# 抄 録

ふりがな	ほねでらむらしょうえんいせきかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	骨寺村荘園遺跡確認調査報告書							
副書名	白山社及び駒形根神社・梅木田遺跡・平泉野遺跡							
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	菅原孝明・二階堂里絵・山川純一							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒021-8501 一関市竹山町7-2 TEL 0191-21-2111(代)							
発行年月日	2016年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほねでらむら しょうえんいせき 骨寺村荘園遺跡	いちのせきしげんび ちょうあざながわ 一関市巖美町字中川	03209	NE72 -2283	38° 58' 36"	140° 57' 08"	20150422 ～ 20150916	596m <sup>2</sup>	遺跡確認 調査
へいせんのいせき 平泉野遺跡	いちのせきしげんび ちょうあざわかいは ら194-115 一関市巖美町字若井 原194-115		NE72 -2197	38° 58' 27"	140° 57' 01"	20150727 ～ 20151125	348m <sup>2</sup>	遺跡確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
骨寺村荘園遺跡	荘園	縄文 中世 近世	掘立柱建物 柱列 柱穴 溝 小溝群 造成平場	陶磁器 金属製品 石製品 土器 石器				
平泉野遺跡	散布地	縄文 近世	塚 段切り造成	縄文土器 磁器				

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集

## 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書

白山社及び駒形根神社・梅木田遺跡・平泉野遺跡

発行 平成28年3月25日

発行・編集 一関市教育委員会  
〒021-8501  
岩手県一関市竹山町7-2  
電話 0191-21-2111(代)

印刷 川嶋印刷株式会社  
〒029-4194  
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21  
電話 0191-46-4161(代)